

HEPTATHELA

VOL. 2, NO.1

1981

九 州 ク モ の 会
Spider Study Group of Kyushu

目 次

- ◇ クモの民族動物学 吉倉 眞 (1)
Ethnozoology in Spiders Makoto YOSHIKURA
- ◇ 硫黄島のクモ目録 下謝名松栄 (10)
Spiders of Iô-Torishima Island Matsuei SHIMOJANA
- ◇ 波照間島および与那国島の真正クモ類 千木良芳範・宮城邦治 (12)
The spiders fauna of Hateruma Is. and Yonaguni Is., Yaeyama
Islands Yoshinori CHIGIRA・Kuniharu MIYAGI
- ◇ 日本産アシナガグモ類の脚長に関する研究 大熊千代子 (16)
Study on the leg's length of Tetragnathid spiders in Japan
..... Chiyoko OKUMA
- ◇ 九州の洞窟産真正蜘蛛類 (N) 入江 照雄 (19)
Cave Spiders of Kyushu (N) Teruo IRIE
- ◇ 日本産真正クモ類の検討 II. ハラカタグモ及びアシマダラナミハグモのタイプ
標本の再記載 小野 展嗣 (38)
Revision of Japanese spider II. Redescription of *Ceratinella*
subulata (Erigonidae) and *Cybaeus striatipes* (Agelenidae)
..... Hirotsugu ONO

HEPTATHELA

VOL. 1, 第一卷 総 目 次

No. 1 第一号 pp. 1 - 32

- 会誌刊行のことば 吉倉 真 (1)
対馬のクモ—新記録並びに2, 3の観察 大熊千代子 (2)
オオトリノフンダマシとトリノフンダマシの生活史 木庭 奏 (8)
南九州の洞窟産真正蜘蛛類(I) 入江 照雄 (17)

No. 2 第二号 pp. 1 - 34

- Yellow Pan Trapによる立花山のクモ 馬場 武彦・大熊千代子 (1)
ガザミグモの採集記録(宮崎県産) 石野田辰夫 (13)
背振山系の蜘蛛(佐賀県) 木庭 奏・大熊千代子 (15)
南九州の洞窟産真正蜘蛛類(II) 入江 照雄 (20)
イエニクダニの生態—温度への適応 野田 和之 (28)

No. 3 第三号 pp. 1 - 28

佐賀県湯ノ原および金刀比羅神社産クモ類採集目録

- (付)採集標本の背甲幅と体長— 松本 誠治 (1)
「佐藤真一・クモノート」について
～大分県のクモ目録資料 No. 1～ 菊屋奈良義 (12)
九州の洞窟産真正蜘蛛類 (III) 入江 照雄 (19)

クモの民族動物学

吉倉 真

熊本市清水町高平151

Ethnozoology in Spiders

Makoto YOSHIKURA

151 Takahira, Shimizu-machi, Kumamoto-shi, 860.

民族動物学からクモの世界をみると、フォークロアを含めて、次のような分野があるように思われる。

(1)はクモを食用あるいは医用とする。またクモの糸、網などを医用あるいは鳥獣魚虫の捕獲用とする。要するに実用的な分野である。(2)はクモを神としてまつり、その祭礼を行う。あるいはクモを超自然的な、不思議な力をもったものと信じ、その力によって病気などを治そうとする。つまり呪術的にクモを利用している分野である。(3)は神話、伝説、昔話などに現れるクモの口承文芸の分野。(4)は絵画、彫刻、演劇などに現れるクモの芸能、技芸関係の分野である。

これらのうちここでとりあげたいのは(2)の分野であるが、(1)の分野でも、矢毒については民族によって多分に呪術的要素を含んでいるので、それも記すこととした。クモについての俗信の報告は数多く、世界的に共通なものも少なくない。それらを逐一あげることはとうていできないので、例は少數にとどめ、そのよっててきたるところを考察しようというのが本文の趣旨である。

クモと矢毒

世界各地の未開民族の中には、主として鳥獣を捕獲するのに、吹矢、弓矢、槍などを用い、その先端に矢毒をつけて獲物をたおしているものが多い。北海道のアイヌは、トリカブトの根から造ったものを矢毒に用いている。(北海道のアイヌは、根も矢毒も、ともにスルクという)スルクの毒性を試す一つの方法として興味のあるのは、根を折って、その折れ口の毒をメクラグモ(ザトウムシ)の口に塗りつけることである。メクラグモの脚がバラバラに落ちてしまうと、そのスルクの毒性は強いとされる。スルクを造るには、根茎を乾かし、それを石の上でつき、水や唾液を加えて泥状にする。それにテンナンショウの根、イケマの根茎、ハナヒリノキ、ニガキ、煙草の煮汁、唐辛子、マツモムシクモ、メクラグモなどを適宜加え、混ぜて仕上げる(知里、1976)。添加物の効果がどの程度のものかよくわからない。多分に呪術的なものがあるようと思われる。

南アメリカのペルー、エクアドル、コロンビア、ギアナ、ブラジルなどにいるインディアンも矢毒を用いる。その原料となる植物は主として *Strychnos toxifera*, あるいは, *Chondodendron*

tomentosum である。矢毒は、前者では樹皮から、後者では蔓の木部からとる。いずれにしても生の浸出液を煮て濃縮したものを用いる。なおこれに動植物からとった幾つかの毒物を添加する。動物だけを用いる場合もある。毒ヘビ、サソリ、毒グモ、ハリアリ (*Paraponera*) などである。蛇毒のように、それだけを単独に用いることもあるが、しかしそれは希で、たいていはほかのものを幾つか混せて使う。

毒グモでは、*Theraphosa blondii* が矢毒の原料になっている。このクモは体長10cmもある大きなもので、毒牙は長さ 2cmほどあり鋭い。このクモにかまれると、その部が壊死する。しかし人命を失うほどの強い毒性はない。なおこれとは別種の、体長4—5cmの小さなトリクイグモも矢毒に使われている。毒はいずれも小動物に対してクラーレのようにはたらく。ハツカネズミではすぐに、テンジクネズミでは数分で効果が現れる。ウサギや小犬なら 15—20 分ぐらいでたおれる。しかし、それ以上大きいものになると効果は期待できない (Vellard, 1965)。矢毒の原料になる大形の動物は、植物ほど容易に、しかも多量に入手することができない。従って植物から得た矢毒に混せて使っている場合が多い。この場合にも、アイヌの矢毒におけると同様、添加することによって矢毒の効能を高めるという、強い呪術的な意図がふくまれているように思われる。

クモに関する俗信

クモは身近にいる動物ではあるが、多くの人はあまり好感はもっていないようで、クモを嫌い、恐れる人も少なくない。しかし広く世界の民族について調べてみると、必ずしもそうではない。民族によっては、クモを神とし崇めている例も少なくないのである。地域によってクモの種類が違い、また民族の生活も違うので、クモとの対応もそれぞれ違うのは当然と言えばそれまでだが、しかしその起源、実態を探究することは非常に興味深い。

未開民族の世界観にクモが登場する例はかなりあるようである。それはおそらくクモの張る円網を見て、その構築の見事さ、素晴らしさに感嘆したことと思われる。アメリカイシディアンのダコタ族は、クモの円網を天空のシンボルとし、そこに守護神の存在を感じ、そこから神秘的な力が放散されるという。アマゾンのインディアン、デサナ族は、世界を大きな円盤と考え、クモの網をそのシンボルとしている。南米のインディアンのある部族は、クモの網・糸を、下界から天上界へのぼるための階段・綱と考えている。またアメリカインディアンのプエブロ族は、クモを天地創造の主役を演じたものと信じている。シーア・インディアンによると、無生物の世に、はじめて現れた絶対者はクモであり、そのクモは二つの小さな包みを持っていた。魔法の歌に応じて、その一つから 1人の女が出てきた。それがインディアンの祖先である。他の一つからは他の民族の男が出てきたという。このようなことは、未開民族のクモに対する畏敬の念をよくあらわしている (Gertsch, 1979; Zahl, 1971)。

なお例をあげると、アメリカ西南部の民間伝承に Spider Woman の話がある。それは織物の発明者で、多くのインディアンの部族に織物を織る技術を教えたものだという。メキシコの チャパス

(州)のインディアンの婦人は、織物をすると、ジョロウグモ (*Nephila clavipes*) の網糸を腕にまきつける (Hunn, 1977)。上手に織物を仕上げるようにとの願いをこめてのことと、前記の民間伝承とつながりがあるように思われる。

北海道のアイヌはクモを信仰の対象とし、ヤッテプ・カムイ（網をかける神）、ヤコル・カムイ（網を所有する神）、オンネ・ヤコル・カムイ（大きい網をもつ神）、カエリキンクル（糸で登る神）、ヤウシケップ・カムイ（網をあむ神）などと呼んでいる(知里, 1976)。十勝地方のアイヌは、朝、肩の上や頭に小さなクモがとまるとき、神の出入する神窓のところへ持っていくて置き、「よい神様よ、あなたが私にして下さったように、どうか私によいことをさすけて下さい」といって祈る。そうすると、山に狩りに行っても必ずよい獲物がさずかるし、川に行っても大漁にめぐまれるという(更科・更科, 1977)。このようにアイヌの場合には、クモは狩猟、漁獲の神様になっている。これはおそらくアイヌが、円網を使ってのクモの狩猟の巧みさに感動し、クモを神として崇め、獲物の多からんことをねがってのことと思われる。

わが国の民俗学では、クモは「水界の主」あるいは「水界の靈」とされている(民俗学研究所(編) (1951) 民俗学辞典；桜井徳太郎(編) (1980) 民間信仰辞典)。しかしこれについては、はなはだ奇異の感がする。と言うのは、ミズグモはわが国にはいることはいるが、それは極めて希なものであるからである。対象になっているクモは、ハシリグモであろうか。

山口県柳井市平郡島の一部の漁民は、クモを漁業神として信仰している。その由来については次のような伝承がある。昔、クモが楠の葉を巻いて、脚を櫓や権のように動かし、海を渡っているのに暗示をえて、楠の大木を切りたおし、中をくりぬき、櫓や権で海を漕ぎ渡ったのが船のはじまりという(亀山一 (1952) クモの信仰 民間伝承16(3) — Atypus No.2 (1953) および桂井(1973) にそれの引用あり)。

一方、クモを悪魔的なものとして恐れ、それからの災厄をのがれようとして神にまつことがある。熱帯、亜熱帯には異様に大きなクモがいて、しかも有毒なものが少なくない。それでそのようなことになるのである。南洋のパラオ群島の土人は、島々にすむ大きなクモをたいへん恐れ、彼らの集会所の柱にその形を彫刻し、神として祭っている(関口, 1952)。

次にクモを超自然的な、神秘的な力をもったものと考え、その力をかりて病気を治そうとする—そのような考えは、未開民族に限らず、文明社会においても昔はかなりあったものである。昔、南アメリカのある民族の間で、Matoutou とよぶ大きなトリクイグモ (*Mygale cancerides*) をとってきて、その鋭角の牙をとり、金で細工し、爪揚枝をつくることが行われていた。それは歯痛をとりのぞくのに神秘的な力をもっているとの信仰からであった(Wood, 1885)。

ヨーロッパでは18世紀末でさえ、家グモが民間療法に使われていた。マラリアその他の熱病を治すのに、イエタナグモをパンにかるく包んで食べる。百日咳を治すのに、クモを病人の頭上にかざし、こんなまじないをした。「クモよ。汝衰えなば、百日咳はもはやとどまらず」。そしてクモを紙袋に入れ、マントルピースの上につるした。それが乾いてしまうころには、百日咳は治るというのである

(Yates, 1968)。アイルランドでは百日咳を治すのに、クモを生きたままクルミの殻に入れ、それを患者に与え、肌身につけさせた(加藤, 1964)。喘息にはクモの巣をまるめてのめばよいという。これらは病気になってから、その治療をねがう一種のまじないである。

ところが故意に病気につからせようと、クモを用いて人を陥れるたちの悪いまじないもある、面白い話を一つあげると、それは中央アジアのタランチュラ酒(*tarantula wine*)のことである。ある種のタランチュラをアルコール漬けにし、それに各種の木の実や草を加え、長い間煮つめる。それは緑褐色をしていて、どんな飲物にでも数滴たらすと、飲んだ人は気を失ない、数時間そのまま眠っている。気がついてもしばらくの間は、精神錯乱して記憶を失い、言うことが辯證があわない。悪い旅館の主人は、商人や従者にその酒を飲ませ、気を失っている間に持ちものをうばうという(Ossendowsky, 1924)。

ところで毒グモにかまれたときの民間療法として、昔、南イタリアに毒グモ踊りというのがあった。15～17世紀の話だが、その地で *tarantula* というクモにかまれると、患者は *tarantism* または *tarantismus* という病気になる。*tarantula*——その名の起りははっきりしない。いろいろ説があるが、それらのうち、南イタリアにある町 Taranto、またはアピアリにあるタラ川(その川岸にはクモが多くて、かまれるとひどいめにあうと言われている)に起原するという説が多く支持されているようである。ここでいう *tarantula* は、アメリカにいるトタゲグモ類のタランチュラとは異なるもので、コモリグモ科の一種である。学名を *Lycosa tarantula* または *L. tarentula* という。刺咬による症候については昔から多くの報告がある。要約すると、刺咬による激しい痛み、水腫、麻痺、嘔吐、一時的精神錯乱、心悸亢進、外陰部露出と持続勃起症、メランコリー、そして死である。

この病気を治す医薬はない。唯一の治療法は、楽師をよんで賑やかに音楽を演奏させ、それに合わせて患者を踊らせてことである。その舞踏または舞踏曲をタランテラ(*tarantella*)という、音楽がだんだん速く、激しくなってくると、患者は踊り狂い、腕を波うたせ、金切り声をあげて歌う。音楽がやむと患者は踊りをやめる。この場合色彩も治療に関係がある。白地に赤、緑、あるいは黄色のリボンなど、患者の好みによって違うが、なにか色彩のあるものを身につけていなければならない。ともかくそんなことが3～4日続くと、患者は疲れはてて深い眠りに陥る。目覚めると病気は治っているという。音楽、ダンス、色彩によるこのような *tarantism* の治療法は、1370年頃に始まりその後、1785年にはスペインまでひろがっていった。しかしへインでは長続きしなかった。やがてこの毒グモ踊りは、一般民衆によって、毎年、夏行われる収穫祭へと移行していった。収穫の季節には毒グモにかまれる人が多い。したがってこの行事を行うことによって、その災厄を祓うというねがいもこめられていたのかも知れぬ(Savory, 1961, 1977; 古野, 1967; Maretic and Lebez, 1969-70; Cloudsley-Thompson, 1976)。なお現代の知識によれば、この刺咬症は、コモリグモとはまったく違ったゴケグモの一種 *Latrodectus tredecimguttatus* によるものではなかったかとのことである。

同じイタリアでも、サルジニア島の tarantism の治療法は、以上述べたこととだいぶ違っている。クモの名は Argia とか Arza と言われ、体長 20cm もある大きなクモというから、ずいぶん誇張したものである。体色はいろいろだが、明るい色のものが多い。このクモにかまれるのは夏で、野良仕事をしているときにやられる。強く痛み高熱がでる。しかし死ぬことはまずない。治療するには患者を牛馬糞などの堆肥の中へ首まで埋める。そしてそのまわりを夏の日盛りに、7人の寡婦が、Don, don, don というちよっとした歌を歌しながら踊り回る。その踊りを Su Ballu de sa pia Argia という。患者が笑えば病気が治るし、そうでなければ死ぬ前兆だという。別な治療法もある。それは患者を程よく熱したかまどの中に入れることである。いずれにしても患者のからだに熱を加え、多量の汗を出させる。汗とともに毒がからだからぬけ出していくと信じてのことである (Lopasic, 1978)。

Bristowe が 1933 年、小アジアのパトモス(島)へ行ったときに聞いた話もこれによく似ている。一人の男が、コモリグモ科の *Tarentula praegrandis* に近いと思われる一種のクモにかまれた。男は早速パン屋に連れていかれ、かまどの中に入れられ、彼が熱に耐えられるかぎり、まき束を燃やして火あぶりにされた (Bristowe, 1958)。この話はわが国の狐落しの迷信を思いださせる。狐に憑かれて気が狂ったと信じられた場合、呪術者は患者を松葉いぶしにして、呪文を唱えながら憑きものを落そうとするのである。

北海道のアイヌは、クモを出産に関する神と信じている。これは他に類をみない、非常にかわった俗信である。久保寺 (1970) によると、胆振弁辺(豊浦)の巫術と助産をよくした老婆には、クモの神と竜蛇の神とが憑いていたという。お産のときには、無事出産をねがっていろいろな神に祈る。難産になって母体も危うくなると、胎児は仕方ないとしても、せめて産婦だけでも助けてほしいと祈る。その時には、まず「大幣の神」(ヌサコロ・カムイ)に祈る。その神の命により配下神である「アシタカグモの女神」(アミ・リ・ヤオシケップ・カムイ、アシケタンネ・カムイ)が産褥に馳せつけ、「火の姫神」および「産神」を応援し、前の高脚を「神の刀槍」とし、「神の熊手」として、安産をさまたげている魔神を引きだして追放する。そしてそれを「戸口の神」の手に渡し、さらに「外庭の神」に渡して、外庭の西のはてへ追いやろうと祈るのである。クモが紡績器官から糸を爪にかけて体外に引きだす。それを出産に結びつけたのかも知れぬ。(ここに言うアシタカグモは、本州以南にいるアシダカグモとは別のもので、真正クモ類に属するものかどうかは明らかでない。知里 (1976) は、アシタカグモ；メクラグモ；モエギマメザトウムシ；アシナガグモをまとめて 1 項目とし、アイヌ名をあげている。道内でも地域によって多少なりと名称が違う。屈斜路ではアミ・タンネ・カムイ(その爪・長い・神)あるいはアミ・タンネと言うが、それが真正クモ類かメクラグモ類か確言はできない。美幌でハミタンネと呼ぶものはアシタカグモで、それに「これが土の上に巣をたくさんかけければ pa pirka(豊年)になると。」と注がっているので、真正クモ類と思われる。なおアイヌの生活とクモについては、小山 (1971) がまとめた報文を書いている)

クモの行動によって天候を予知することが、広く世界の民族にみられる。農民、漁民にとって、

天候如何が生活に非常な影響を及ぼすので、あらゆる自然現象を仔細に観察してそのことを知ろうとする。クモの行動もその中に含まれるわけである。朝、クモが草間にたくさん網を張っている；円網を張るクモが網の中央にいる；店網を張るクモが、その住居の入口に出ている。これらはすべて天気がよくなる前兆である。これに対して、家の周りにいるクモが家の中へ入ってくる；円網を張るクモが、網を張るのに糸を短くする。これなどは天気が悪くなる前兆である。大風が吹く前にはクモは網をたたむという。なお天気に関するところで、クモを殺すと雨が降るという俗信もある。

遊糸（gossamer）が野に、海上なら船の上に飛ぶのを見たら、それは天気のよくなる知らせであるという。日本では東北で、晚秋、遊糸が空を飛ぶのを「雪迎え」と呼んでいるが、それについて書籍（1964, 1972, 1974, 1975）の著書に詳しい。

終わりにクモを縁起ものとみる風習について述べる。イギリスでは古くから、クモが天空から下りてきて人の上にとまれば、縁起がよいとしている。お金が入るとか、遺産がころがりこんでくるなどという。そのクモを財布に入れておけば、小遣銭に困らないともいう（Brand, 1870；加藤, 1964）。その縁起のよいクモをmoney spiderという。サラグモ科（コサラグモ科をふくむ）のクモである。特に遊糸に乗って空中飛行する *Erigone dentipalpis* をさす人もいる。（money spiderを、ハエトリグモ科の *Salticus scenicus*, あるいはコガネグモ科の *Aranea scenica* としている辞典があるが妥当でない）アメリカ合衆国にもこれに似た俗信がある。money spiderとは言わないようだが、とにかく小さなクモが着物にとまっているのを見て、贈りものがある；新しい着物が着れる；お金が入る；お客様がくるなどといって喜ぶ。ドイツでは、十字架グモ（Kreuzspinne）と呼んでいるニワオニグモなどを、「聖母の使いの小動物」、「幸福をもたらす小動物」として大事にしている（西郷, 1971）。

縁起が悪いという例をあげると、台湾では、脚が1本でもとれているアシダカグモが現れると、死人がでる前兆といって嫌う。日本でも地方によっては、夜グモは盗人の先走り、家グモが天井に白い巣をかけければ不幸をもたらすなどという。

アメリカ合衆国では、黒いクモは縁起が悪いが、白いクモは縁起が良いという。しかし時としてその色が逆になることもある（Headstrom, 1973）。これに関連して面白い話がチベットにある。彼地では白いクモをdom-dkar-poといい、黒いクモをdom-nag-poという。黒いクモは惡靈（bdud）をもっているので、家にいたら外へ捨てねばならない。しかしそのクモのからだの上へ小麦粉でも振りかけて白くすれば、それは無害のものに変わるのでそのままにしておいてもよいという（Jest, 1975）。（白が生、正、善、幸、黒が死、邪、惡、不幸のシンボルになっていることは、日本でも広く知られている）

同じクモでも、時と場合によっては、縁起が良いともされ、縁起が悪いともされる。オセアニアのサモア島では、クモが人の前に下りると吉だが、後ろに下りると凶という。文明社会にも、似たような話がいくらもある。最もよく知られている例は、朝グモ、夜グモによる前兆予知（omen）である。朝グモは良くて、夜グモは悪いという俗信はほとんど全国的に広く分布している。朝グモを幸運のし

るしとして喜び、紙に包んで神棚にあげたり、人に知られぬようたもとに入れておいたりする。ところが夜グモは不吉といって嫌い、追い払ったり、殺したりする。ところが地方によってはそれと逆で、奄美大島の名瀬、鹿児島、宮崎、熊本、長崎などのある地域では、夜のコブ（九州ではクモをコブという）をヨロコブの語呂に合わせて殺すのを忌み、反対に朝のコブを不吉として追い払ったり殺したりする。それと同じことが、遠く離れた山形、宮城などのある地域にもあるという。どういうことであんなったかよくわからないが興味あることである。朝グモも夜グモも、ともに福があるといって喜ぶ地方もある。高知、広島、山口などのある地域にそのような例が知られている（中村、1939；八木沼、1966；片岡、1967；桂井、1973）。

ヨーロッパでもフランスでは、*Araignée du soir, espoir, Araignée du matin, chagrin* といい、ドイツでは、*Spinnen am Morgen, Kummer und Sorgen, Spinnen am Abend, Erqucken und Labend* という。順序は逆になっているが、いずれにしても朝のクモは縁起が悪くて、夜のクモは縁起が良いということである。アメリカでもこれに似て、*Spider in the morning is a warning, Spider at night is a delight* という。

なぜこのようなことになるのかはよくわからない。しかしこれはクモだけのことでもないようで、たとえばカラスなどについても似たようなことが知られている。鳥啼きが悪いのは死の予兆である。カラスに糞をかけられると良くないことが起こるという。しかし狩りに出てカラスに会うと、「かちがらす」で縁起が良いという。カラスを神の使いとしてまつる地方もあり、カラスに餅や米を与えて、その食べ方によって吉凶を判断する地方もある。このように、カラスにしてもクモにしても、吉凶両面に登場してくる不思議な動物である。そのよってきたる所以を考えるには、まず問題となる動物の色、形、行動など、次にそれに対する人間の感情、さらに両者出会いのシチュエーションを明らかにする必要がある。カラスを例にとってみれば、この鳥はよく知られているように、まっ黒い色をしていて、スズメ類としては大形であり、しかもその行動は剽悍である。雌雄ともまっ黒い鳥はめったにいないものである。（黒は不幸、死のシンボル）彼らは大群をなして空をおおい、不気味な声でなく。下りては死屍、腐肉も好んで漁るほどの悪食である。こういうものには誰しも不安と恐れを感じるであろう。それが日暮れともなればなおさらである。日暮れはやがて夜を迎える不安な一刻である。昔は日暮れになって、いつまでも子供たちが外で遊んでいると、妖怪に連れていかれるから早く家へはいりなさいと、母親がよく言ったものである。そのようなシチュエーションにおいては、どうみてもカラスは吉兆の鳥ではありえない。

クモにおいても同じようなことが言えると思う。アシダカグモのように大きなクモが、夕方、壁などにへばりついておれば、誰しも気味悪く、不安な感じになるのは当然で、そのようなことから夜のクモは縁起が悪いという俗信が発生したのかも知れぬ。それとも、夕方軒端に現れて大きな網をはるオニグモを見てのことであろうか。いずれにしても、異様に大きな、色、形の不気味なクモが、本能的にそのようなものを恐れている人間の前に、薄暮、忽然として出現したことが、夜グモを凶とする

俗信を生んだもので、別にクモが人に危害を加えたからというわけではない。

ところで、禍を転じて福にしようとするのが人間の知恵である。凶となっているものを、それを生じたシチュエーションとはまったく異なる別のシチュエーションに置きかえ、それと新たな関係を結ぶことによって、吉へと転換させようとする——そんな意図が自然とわいてくることもあるのである。それ故に、クモをコブと呼ぶ九州において、夜のコブを「よろこぶ」と言いなし、凶を吉に転換させたのは、なんの不思議もないであろう。

俗信の由来については、さきに述べたように、地域によってクモの種類も違うし、また人間の生活様式も違うので、一概には言えない。クモはたいてい家グモだが、それに人間が、いつ、どのような場合に、どう対応したかという、つまりその時々のシチュエーションによって、いろいろな俗信が生まれてきたわけだが、今のところ、そのようなことについての研究はほとんどないと言ってよい。

引　用　文　獻

- Brand, J., 1870. *Observations on Popular Antiquities*. 加藤憲市(訳)
1965. イギリスの故事. 研究社.
- Bristowe, W. S., 1958. *The World of Spiders*. Collins, London.
- 知里真志保, 1976. 知里真志保著作集 別巻1 分類アイヌ語辞典. 平凡社.
- Cloudsley-Thompson, J. L. 1976. *Insects and History*. Weidenfeld and Nicolson, London.
- 古野清人, 1967. 原始文化ノート. 紀伊国屋書店.
- Gertsch, W. J., 1979. *American Spiders* (2nd ed.). Van Nostrand Reinhold, New York, London.
- Headstrom, R. 1973. *Spiders of the United States*. Barnes, New York.
- Hunn, E. S., 1977. *Tzeltal Folk Zoology*. Academic Press, New York, London.
- Jest, C., 1975. Conception du monde animal chez les Tibétains.
“*l'homme et l'animal*”, Premier Colloque d' Ethnozoologie,
Institut International d' Ethnoscience. Paris. pp. 23-29.
- 片岡佐太郎, 1967. 蜘蛛の俗信. Atypus, (43) : 13-16.
- 加藤憲市, 1964. 英文学動物ばなし. 松柏社.
- 桂井和雄, 1973. 俗信の民俗. 岩崎美術社.
- 小山政弘, 1971. アイヌの生活とクモ. Atypus, (57) : 33-38.
- 久保寺逸彦, 1970. (アイヌの)妊娠と出産. アイヌ文化保存対策協議会(編)アイヌ民俗誌.

- 第一法規出版。pp. 456-465.
- Lopasic, A., 1978. Animal lore and evil-eye in Shepherd Sardinia. *Animals in Folklore* (ed. by J. R. Porter and W. M. S. Russell). Brewer, Cambridge / Rowman & Littlefield, New Jersey. pp. 59-69.
- Maretić, Z., Lebez, D., 1969-70. *Lycosa tarantula* in fact and fiction. Bull. Mus. Hist. nat., 2e sér., 41 (suppl. 1) : 260-266.
- 中村正雄, 1939. 楽之堂隨筆(第三) 11. 蜘蛛の玩養と土俗. Acta Arachnol., 6 : 67-72.
- 錦 三郎, 1964. 蜘蛛百態. 赤光発行所(山形市).
- _____, 1972. 飛行蜘蛛. 丸の内出版.
- _____, 1974. 空を飛ぶクモ. 學習研究社.
- _____, 1975. 雪迎え. 三省堂.
- Ossendowsky, F., 1924. *Man and Mystery in Asia*. New York.
- 大久保忠利(訳) 1941. アジアの人と神秘. 生活社.
- 西郷啓造, 1971. 文学のふるさと—ドイツ民族とその民間信仰. 朝日出版社.
- 更科源蔵・更科 光, 1977. コタン生物記(Ⅲ), 法政大学出版局.
- Savory, T. H., 1961. *Spiders, Men, and Scorpions being the History of Arachnology*. University of London Press, London.
1977. *Arachnida* (2nd ed.). Academic Press, London.
- 関口晃一, 1952. クモの生活. 同和春秋社.
- Vellard, J., 1965. *Histoire du Curare*. Gallimard, Paris.
- Wood, Rev. J. G., 1885. *The New Illustrated Natural History* (3rd ed.). George Routledge and Sons, London.
- 八木沼健夫, 1966. 夜のクモ・朝のクモ. Atypus, (41-42) : 42-44.
- Yates, J. H., 1968. *Spiders of Southern Africa*. Books of Africa, Cape Town.
- Zahl, P. A., 1971. What's so special about spiders? Nat. Geogr., 140 : 190-219.

硫 黃 鳥 島 の ク モ

下謝名 松 栄

浦添高等学校

Spiders of Iō-Torishima Island

Matsuei SHIMOJANA

Urasoe Senior High School, Urasoe City, Okinawa

硫黄鳥島は奄美群島の徳之島の西方海上約70kmの北緯 $27^{\circ}51'$ 、東経 $128^{\circ}13'$ に位置する無人島である。島の長径 2.2 km, 短径 1 km の小島で、霧島火山帯に属している沖縄県下唯一の活火山の島である。島の北端海拔 217 m の西側に現在の噴火口があるが、島の中央部には大きなカルデラもあり、島全体が火山噴出物によっておおわれている。島には川や池は勿論なく、土壌も貯水力が極めて弱いためにフローラも貧弱で、植生の発達もよくない。

小生は 1974 年 8 月 24 日にこの小島に上陸し、わずか 6 時間ではあったがクモを採集する機会を得た。短時間の採集の為、大変不十分な資料ではあるが少しでもお役にたてばと思い報告することにした。

まだ種名まで決定できないのが 4 種あるが、これらについて明らかになり次第後日報告することにする。

終りにこの調査の機会を与えていただいた琉球大学理学部池原貞雄博士に深謝いたします。

Fam. Argiopidae コガネグモ科

1. *Araneus subpullatus* Bös. et Str. ヘリジロオニグモ 2♀
2. *A. fuscocoloratus* Bös. et Str. ヤミイロオニグモ 3♀
3. *Neoscona theisi* (Walckenaer) ホシシジオニグモ 12♀ 6♂y 3♂y
4. *Argiope aemula* (Walckenaer) ナガマルコガネグモ 1♀
5. *Cyclosa insulana* (Costa) シマゴミグモ 1♀
6. *C. vallata* Keyserling マルゴミグモ 2♀ 1♂y

Fam. Thomisidae カニグモ科

7. *Philodromus aureolus japonicola* Bös. et Str. アサヒエビグモ 1♀

Fam. Salticidae ハエトリグモ科

8. *Hasarius adansoni* (Audouin) アダンソンハエトリ 2♂ 4♀

9. *Carrhotus detritus* Böss. et Str. ネコハエトリ 1♀ 1♀y
10. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ 2♀y
11. *Plaxippus paykulli* (Audouin) チャスジハエトリ 3♂

Fam. Clubionidae フクログモ科

12. *Orthobula crucifera* Böss. et Str. オトヒメグモ 2♀

Fam. Gnaphosidae ワシグモ科

13. *Drassodes oculinotatum* Böss. et Str. チャクロワシグモ ♀ 1♂y

なお次の4科のクモが得られたが幼生の為に種まで分類することはできなかった。

Amaurobiidae, Theridiidae, Thomisidae Salticidae

八木沼健夫, 1978. 原色日本蜘蛛類大図鑑(増補改訂 第5刷), 1~206. 保育社. 大阪.

波照間島および与那国島の真正クモ類

千木良 芳 範

沖縄市美里 2649-1, 美里団地A-4, 202号

宮 城 邦 治

沖縄国際大学

The spider fauna of Hateruma Is. and Yonaguni Is.,
Yaeyama Islands

Yoshinori CHIGIRA

202, A-4 Misato Danchi, 2649-1, Misato, Okinawa City, 904-21

Kuniharu MIYAGI

Okinawa Kokusai University, Ginowan City, Okinawa

はじめに

八重山諸島の真正クモ類については、大井(1963)、八木沼(1964)、下謝名(1967, 1970)らが報告しているが、いずれも石垣島および西表島に関するものである。八重山諸島の他の島々における調査はほとんどなく、わずかに与那国島についてのみ大利・樋山(1976)が報告しているだけである。

著者のひとりである宮城は、1980年9月と11月に八重山諸島のうちの波照間島と与那国島を訪ねる機会を得、いくらかの真正クモ類を採集することができた。これらの標本についてまとめておくことは、八重山諸島における真正クモ類相の研究にとって一助となるものと考えられるので、ここに報告する。本稿を草するにあたり、標本の同定に際し有益な助言を頂いた下謝名松栄氏に深謝の意を表します。

採集目録

すべての標本は宮城によって採集され、これを千木良が同定しました。和名、学名、および種の配列は八木沼(1970)によっている。和名の後に付した記号は産地と採集月日を示しており、それぞれH9(波照間島9月18日～21日採集)、H11(波照間島11月19日～22日採集)、Y9(与那国島9月22日～27日採集)で表わしている。

Uloboridae ウズグモ科

(1) *Uloborus varians* Bös. et Str ウズグモ H9

Theridiidae ヒメグモ科

(2) *Conopistha bonadea* Karsch シロカネイソウロウグモ H9

Argiopidae コガネグモ科

- (3) *Araneus fuscocoloratus* Bös. et Str. ヤミイロオニグモ H9, Y9
- (4) *A. subpullatus* Bös. et Str. ヘリジロオニグモ H9, H11, Y9
- (5) *Argiope aemula* (Walckenaer) ナガマルコガネグモ H9
- (6) *Cyclosa argenteoalba* Bös. et Str. ギンメッキゴミグモ H9
- (7) *C. monticola* Bös. et Str. ヤマゴミグモ H9, Y9
- (8) *Gasteracantha mammosa* (C. Kooh) チブサトゲグモ H9
- (9) *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ H11
- (10) *Poltys illepidus* C. Koch ゲホウグモ Y9

Tetragnathidae アシナガグモ科

- (11) *Leucauge blanda* (L. Koch) チュウガタシロカネグモ H11
- (12) *L. magnifica* Yaginuma オオシロカネグモ H11
- (13) *Tetragnatha praedonia* L. Koch アシナガグモ Y9

Pisauridae キシダグモ科

- (14) *Dolomedes* sp. ハシリグモの一種 H11
- (15) *Pisauridae* sp. キシダグモ科の一種 Y9

Lycosidae コモリグモ科

- (16) *Lycosa pseudoannulata* (Bös. et Str.) キクズキコモリグモ H11
- (17) *Pardosa T-insignita* (Bös. et Str.) ウズキコモリグモ H11
- (18) *Pirata* sp. カイゾクコモリグモの一種

Oxyopidae ササグモ科

- (19) *Oxyopes sertatus* L. Koch ササグモ H9

Thomisidae カニグモ科

- (20) *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ Y9
- (21) *Philodromus* sp. エビグモの一種 Y9
- (22) *Runcinia* sp. シロスジグモの一種 Y9
- (23) *Thomisus labefactus* Karsch アズチグモ Y9
- (24) *Xysticus croceus* Fox ヤミイロカニグモ H9

Salticidae ハエトリグモ科

- (25) *Hasarius adansonii* (Audouin) アダンソンハエトリグモ H9, Y9
(26) *Plexippus paykulli* (Audouin) チャスジハエトリグモ H11
(27) *Rhene atrata* (Karsch) カラスハエトリグモ H9

Heteropodidae アシダカグモ科

- (28) *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ H9, Y9

ま　と　め

今回採集された標本は10科24属28種からなっていた。その内訳は、波照間島10科18属21種、与那国島6科10属12種である。両島間の種類数の差は、おそらく採集日程の違いによるものであろう。今回採集された種類は、キシダグモ科の一一種とエビグモの一一種を除いてすべて沖縄島との共通種であった。比較的目にとまりやすい普通種が多く採集されたようである。

八重山諸島の真正クモ類については、大井(1963)が西表島から44種、八木沼(1964)が西表島から16種、石垣島から26種、下謝名(1967, 1970)が西表島から80種、石垣島から56種を報告している。大井・樋山(1976)は、西表島から74種、石垣島から68種、与那国島から62種を報告し、前出の報告とも併せて検討した結果、宮古島をも含めた先島諸島の真正クモ類相が27科80属120種からなることを明らかにした。今回採集された種類はすべてこれに重複するものであったが、ギンメッキゴミグモだけは、宮古島での記録はあるものの、八重山諸島ではまだ報告されていない。

与那国島から採集された11種のうち、ヘリジロオニグモ、ヤマゴミグモ、ゲホウグモ、シロスジグモの一一種の4種が新たに加えるべき種類であった。その結果、与那国島の真正クモ類相は24科52属66種からなることが知られた。

波照間島からは10科18属21種が記録されたが、現在のところ波照間島からの報告はまったくないので、今回の記録はすべて波照間島新記録となる。

引　用　文　献

大井良次, 1963. 沖縄本島・西表島のクモ. *Atypus*, (29) : 15-17.

大利昌久・樋山御理男, 1976. 先島諸島(八重山群島・宮古群島)の真正蜘蛛類相とその生息域. *Atypus*, (66) : 15-23.

下謝名松栄, 1967. 琉球列島のクモ相について. 沖縄生物学会誌, 4 (6) : 16-25.

———, 1970. 動物の地理分布をどう指導したらよいか. 沖生教研会誌, (4) : 38-68.

八木沼健夫, 1964. 南西諸島のクモ. 南西諸島学術調査報告(自然科学編). pp. 56,
関西自然文化研究会, 大阪.

———, 1970. 日本の真正蜘蛛類相. 国立科博研報 13 (4) : 639—701.

日本産アシナガグモ類の脚長に関する研究

大熊 千代子

九州大学農学部昆虫学教室

Study on the leg's length of Tetragnathid spiders in Japan

Chiyoko OKUMA

Faculty of Agriculture, Kyusha Univ., Fukuoka, 812

クモ類の記載には、体長などと共に脚長についても測定値を記述するのが普通である。また脚式 (Leg formula)と称し、4対の歩脚のうち最も長い脚から順に、1・2・4・3とか1・4・2・3などと脚長比を表わし、同定の手がかりに利用している。クモ類の脚長比に関する研究としては、日本では福本伸男(1964)が過去の記載のデータから日本産125種のクモの脚式と脚比を求め、脚比とクモの生活様式(脚の分業的機能)の相関を示唆している。また植村利夫(1977-78)はジョロウグモの歩脚長の変異を研究したが、その中でジョロウグモの4対の歩脚間には2.3:1.9:1:1.7または2:1.6:1:1.4の基準比が確保されていると述べている。外国では Beatrie R. vogel (1970) が Lycosidae の背甲長と(歩脚の)節長 (Patella+tibia または Metatarsus) の相関をグラフに表わしている。しかし、脚長比について深く追求されたまとまった研究はまだないのではないかと思われる。筆者はアシナガグモ各種を用いて脚長比と腿節長比の検討を行った。その結果、多くの種が、体の大小や産地の違いにも拘らず、ほぼ固有の脚長比または腿節長比をもつていることを確かめたのでここに報告する。

材料および方法

現在日本から20種のアシナガグモが記録されているが、そのうち筆者が手に入れることができた16種について測定を行った。希少種については全個体を測定したが、普通種については、なるべく日本全土の、大小さまざまの標本を材料に選び、一方、台湾、韓国、タイ、フィリピンの材料も参考とした。雌雄とも成体標本を用いた。また種の同定は筆者が行った。測定は接眼ミクロメーター(10×10)で行い、腿節は腿節の長さを、脚長については各節の長さを後で合計した。滅多になかったが、異常に短かい脚(再成脚と思われるもの)は除外した。また多くの個体では左右の脚長(または各節長)が少しずつ異なっていたが、この違いは全く不規則であると思われたので、ここでは細かく留意せず、なるべくくせのない、測定しやすい脚を選んで測定した。以上の測定値に基づいて、各種別々に、雌、雄ごとの、第1脚脚長、または腿節節長に対する第2、3、4脚の脚長または腿節長の比と、各々の相関係数(r)を求めた。クモ類では、腹部は伸縮するため、体の大きさを表わすのに背甲の幅または長さを用いる。脚長比などを表わすにも、背甲の幅または長さを基準にするのが常識的であろう。しかし筆者が調べたアシナガグモ類では、第1脚脚長と背甲幅の相関は表1に

みられるように必ずしも高くはなかった。即ち、種固有の脚長比または腿節長比を求めるには、4対の歩脚または腿節間で比較するのが有効だと思われる。植村の脚長比は筆者の方法と似ているが、植村は最小の第3脚を基準にした。筆者が第1脚を基準にした理由は、第1脚は最長で、そのため測定誤差が最小におさえられると考えたからである。

結 果 と 考 察

図1は *T. praedonia* L. Koch の脚長をプロットしたグラフである。横軸は第1脚の長さ、縦軸は各々第2、3、4脚の長さを示す。このグラフに使用された材料は台湾産(▲印)、北海道産(■印)の他、日本の各地から任意に選ばれたものである。各々ほぼ直線上に乗っており、相関係数の値が高いということは、産地や体の大小に拘らず、本種がほぼ一定の脚長比をもっていることを表わしている。この中の最小個体は台湾産の体長4.8mm、背甲幅1.13mm、最大個体は宮崎産の体長11.4mm、背甲幅2.3mmである。相関係数(r)は第1脚：第2脚でもっとも高く($r=0.994$)、以下1:4($r=0.991$)、1:3($r=0.983$)の順であった。

表1は筆者が調べた日本産16種のアシナガグモの第1脚に対する第2、3、4脚の脚長比と相関係数、及び第1脚脚長に対する背甲幅の相関係数を表わしたものである。第1脚：背甲幅の相関係数は一般に低く、種によってはかなり低いものがあるが、脚長の、特に1:2または1:4の相関係数は殆んどの種で非常に高いことがわかる。このことは各種とも各々ほぼ一定の脚長比をもっていることを表わしている。比の数値に関しては類似したものが多い。しかし、例えば外部形態が類似しているため同定が困難である *T. squamata* と *T. yesoensis* は、雄では明らかに異なった脚長比をもっている。表2は腿節の長さを用いて同様の計算をしたものである。相関係数は脚長の場合と同様に高かった。また腿節長比による他種との比較では、例えば、雄の *T. squamata* と *T. yesoensis* は脚長比の場合と同様に利用することができる。

表3-10は国内或は国外を含めた地域別による違いを脚長比と腿節長比でしらべたものである。脚長比、腿節長比は全種とも地域によって少しづつ違っていた。*T. japonica* (表4&5)、*T. javana* (表6)、*T. mandibulata* (表8)、*T. nitens* (表9)については、脚長比、腿節長比とも地域別に少しづつ差があるが、その差がこの4種に並行して現われた点で興味がある。即ち、日本、台湾、(フィリピン)、タイの順に第1脚に対する第2、3、4脚の比が各々少しづつ短かくなっている。日本では季節も要因になると思われる所以 *T. japonica* (表4&5)には採集月を記入した。それによると福岡の同じ場所で採集した5月と8月の標本を比較したところ、雌、雄とも5月よりも8月の標本の方が1:2(脚)の比がわずかに小さかった。5月の標本は幼生越冬をしたため、成熟までに半年以上の月日を要している。また8月の標本は当年のクモで、孵化後わずか1~2カ月で成熟したものと考えられる。しかし、この成育日数の違いが、脚長比の差の原因であるか否かは今後の問題だと思われる。表7 (*T. makiharai*) は現在のところ南西諸島と対馬でのみ生息が確認されている。比較的分布がせまいため、移動力の少ない種ではないかとも考えられ、しかも

表1 & 2の相関係数の値がやや低い傾向にあるので、島ごとの変異が期待されたが、島ごとの比較でも相関係数の値はあまり高くならなかった。これは本種の脚長比、腿節長比にややばらつきがあることを表わしている。

結 論

アシナガグモ属の各種は、各種固有の脚長比または腿節長比をもっているようである。この脚長比または腿節長比は地域によって、季節によって、または雌雄で多少異なるが、全く異なることはまれである。脚長比の違いは、福本が示唆したようにクモの生活様式の違いを反映していると考えられる。アシナガグモ属の種間では、それぞれの種の網の大きさ、網の目の細かさの違いがあるであろう。また交接のときの機能も考えられる。将来ではこの方面への検討も興味ある問題である。更に今一つはこの脚長比または腿節長比を検討することによって種の同定の手がかりに利用できないかということである。特に分布が広いアシナガグモ属は、今後世界的視野での種の検討が必要と思われる所以、約330種の既知種及びまだでてくるであろう新種の同定の手がかりに、この脚長比または腿節長比が有效地に使えるのではないかと思われる。

参 考 文 献

- 福本伸男, 1964. クモの脚比について: 15p.
植村利夫, 1967. 蜘蛛類の自然集団に見られる段階変異と進化の過程: 180p. (東亜蜘蛛学会).
植村利夫, 1977~78. 段階変異と段階成長に関する研究(2), 杏林大学医学部教養課程研究報告,
第4巻~第6巻別刷.
Vogel, Beatrice R., 1970. Taxonomy and Morphology of the *sternalis*
and *falcifera* Species Groups of *Pardosa*, The Armadillo
Papers No. 3 : 1 - 31.

表-1. 日本産アシナガグモ属各種の脚長比。

(n=資料数, ratio=第1脚を100としたときの比, r=第1脚との相関係数).
＊背甲幅(参考用)。

Species	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)	Width of carapace * (r)
(♂)					
<i>caudicula</i>	13	60 (0.990)	27 (0.984)	62 (0.996)	(0.842)
<i>ceylonica</i>	7	57 (0.980)	24 (0.922)	54 (0.982)	(0.866)
<i>extensa</i>	11	67 (0.995)	32 (0.970)	64 (0.996)	(0.909)
<i>japonica</i>	13	59 (0.995)	27 (0.984)	59 (0.995)	(0.552)
<i>javana</i>	10	57 (0.969)	25 (0.918)	58 (0.959)	(0.694)
<i>laqueata</i>	17	73 (0.997)	38 (0.982)	68 (0.993)	(0.556)
<i>lauta</i>	4	49 (0.994)	22 (0.951)	46 (0.929)	/
<i>makiharai</i>	24	56 (0.979)	24 (0.957)	53 (0.967)	(0.874)
<i>mandibulata</i>	4	61 (0.991)	27 (0.970)	59 (0.994)	(0.921)
<i>nitens</i>	7	69 (0.985)	31 (0.973)	64 (0.982)	(0.838)
<i>pinicola</i>	10	68 (0.995)	34 (0.988)	60 (0.990)	(0.937)
<i>praedonia</i>	20	62 (0.994)	28 (0.983)	58 (0.991)	(0.928)
<i>shikokiana</i>	16	68 (0.991)	30 (0.963)	63 (0.991)	(0.752)
<i>shinanoensis</i>	7	61 (0.989)	27 (0.806)	53 (0.964)	(0.536)
<i>squamata</i>	10	76 (0.975)	39 (0.954)	65 (0.977)	(0.363)
<i>yessoensis</i>	12	72 (0.996)	38 (0.991)	59 (0.994)	(0.915)
(♀)					
<i>caudicula</i>	11	60 (0.986)	28 (0.946)	64 (0.978)	(0.730)
<i>ceylonica</i>	12	58 (0.972)	25 (0.947)	57 (0.972)	(0.762)
<i>extensa</i>	16	66 (0.983)	33 (0.929)	64 (0.982)	(0.821)
<i>japonica</i>	15	60 (0.993)	28 (0.981)	58 (0.996)	(0.888)
<i>javana</i>	10	55 (0.943)	25 (0.863)	57 (0.941)	(0.738)
<i>laqueata</i>	6	74 (0.980)	40 (0.921)	72 (0.970)	(0.589)
<i>lauta</i>	3	44 (0.945)	21 (0.993)	46 (0.985)	/
<i>makiharai</i>	36	55 (0.972)	25 (0.773)	54 (0.975)	(0.586)
<i>mandibulata</i>	9	60 (0.992)	28 (0.983)	60 (0.977)	(0.826)
<i>nitens</i>	10	68 (0.997)	31 (0.990)	64 (0.993)	(0.940)
<i>pinicola</i>	10	68 (0.999)	36 (0.997)	62 (0.997)	(0.963)
<i>praedonia</i>	11	60 (0.988)	27 (0.973)	56 (0.993)	(0.872)
<i>shikokiana</i>	16	69 (0.988)	31 (0.976)	66 (0.985)	(0.613)
<i>shinanoensis</i>	15	61 (0.982)	28 (0.962)	55 (0.957)	(0.770)
<i>squamata</i>	8	74 (0.981)	40 (0.962)	64 (0.946)	(0.960)
<i>yessoensis</i>	11	73 (0.993)	40 (0.972)	62 (0.994)	(0.900)

表一 2. 日本産アシナガグモ属各種の腿筋長比。

Species	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
<i>caudicula</i>	13	66 (0.992)	34 (0.982)	75 (0.998)
<i>ceylonica</i>	7	64 (0.979)	29 (0.921)	64 (0.997)
<i>extensa</i>	11	74 (0.993)	39 (0.961)	77 (0.994)
<i>japonica</i>	13	66 (0.994)	34 (0.993)	71 (0.996)
<i>javana</i>	10	64 (0.970)	31 (0.897)	71 (0.958)
<i>laqueata</i>	17	80 (0.979)	50 (0.951)	86 (0.979)
<i>lauta</i>	4	55 (0.990)	27 (0.828)	59 (0.939)
<i>makiharai</i>	24	62 (0.958)	29 (0.860)	62 (0.947)
<i>mandibulata</i>	4	68 (0.977)	34 (0.953)	73 (0.989)
<i>nitens</i>	7	77 (0.994)	38 (0.986)	76 (0.991)
<i>pinicola</i>	10	74 (0.994)	42 (0.976)	72 (0.990)
<i>praedonia</i>	20	70 (0.996)	35 (0.990)	69 (0.995)
<i>shikokiana</i>	16	74 (0.981)	35 (0.981)	75 (0.992)
<i>shinanoensis</i>	7	68 (0.978)	36 (0.642)	66 (0.903)
<i>squamata</i>	10	81 (0.969)	50 (0.866)	80 (0.963)
<i>yosoensis</i>	12	78 (0.993)	47 (0.987)	71 (0.995)
(♀)				
<i>caudicula</i>	11	65 (0.990)	34 (0.955)	78 (0.980)
<i>ceylonica</i>	12	65 (0.970)	30 (0.891)	68 (0.966)
<i>extensa</i>	16	71 (0.988)	39 (0.923)	76 (0.987)
<i>japonica</i>	15	66 (0.994)	35 (0.981)	70 (0.993)
<i>javana</i>	10	61 (0.958)	31 (0.894)	70 (0.925)
<i>laqueata</i>	6	78 (0.963)	50 (0.814)	88 (0.974)
<i>lauta</i>	3	50 (0.991)	26 (1)	56 (0.997)
<i>makiharai</i>	36	61 (0.902)	28 (0.788)	63 (0.962)
<i>mandibulata</i>	9	67 (0.985)	35 (0.966)	73 (0.983)
<i>nitens</i>	10	75 (0.993)	37 (0.985)	76 (0.993)
<i>pinicola</i>	10	75 (0.999)	44 (0.990)	76 (0.997)
<i>praedonia</i>	11	67 (0.991)	34 (0.981)	68 (0.995)
<i>shikokiana</i>	16	74 (0.983)	36 (0.919)	79 (0.976)
<i>shinanoensis</i>	15	68 (0.896)	37 (0.822)	68 (0.581)
<i>squamata</i>	8	80 (0.969)	51 (0.949)	79 (0.917)
<i>yosoensis</i>	11	79 (0.981)	49 (0.960)	75 (0.982)

表-3. トガリアシナガグモ *T. caudicula* (Karsch) の脚長及び腿節長比(上段脚長、下段腿節長)。

Locality	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Hokkaido	1	62 /	28 /	63 /
Tokyo	2	60 /	27 /	62 /
Tottori	1	61 /	28 /	62 /
Tokushima	4	60 (0.998)	27 (0.999)	61 (0.999)
Ryukyu Is.	5	59 (0.996)	27 (0.980)	62 (0.999)
Korea	3	61 (0.992)	27 (0.969)	61 (0.988)
Total	16	60 (0.990)	27 (0.981)	62 (0.995)
(♀)				
Hokkaido	2	61 /	29 /	64 /
Nikko	1	62 /	30 /	64 /
Tokyo	2	61 /	28 /	62 /
Tokushima	4	60 (0.986)	28 (0.883)	64 (0.980)
Ryukyu Is.	2	59 /	28 /	67 /
Korea	9	61 (0.978)	28 (0.980)	63 (0.977)
Total	20	60 (0.983)	28 (0.955)	63 (0.974)
(♂)				
Hokkaido	1	67 /	34 /	77 /
Tokyo	2	67 /	34 /	75 /
Tottori	1	68 /	34 /	76 /
Tokushima	4	66 (0.999)	34 (0.999)	75 (0.998)
Ryukyu Is.	5	65 (0.993)	34 (0.957)	75 (0.999)
Korea	3	68 (0.993)	35 (1)	75 (0.945)
Total	16	66 (0.989)	34 (0.980)	75 (0.996)
(♀)				
Hokkaido	2	65 /	34 /	78 /
Nikko	1	68 /	36 /	77 /
Tokyo	2	65 /	34 /	75 /
Tokushima	4	65 (0.990)	34 (0.885)	77 (0.991)
Ryukyu Is.	2	65 /	34 /	81 /
Korea	9	67 (0.978)	34 (0.974)	76 (0.975)
Total	20	66 (0.984)	34 (0.961)	77 (0.976)

表-4. ヤサガタアシナガグモ *T. japonica* Böös. et Str. の脚長比。

Locality or Country	Moth of collection	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)					
Fukuoka	V	12	60 (0.985)	27 (0.952)	59 (0.985)
"	VIII	12	59 (0.996)	27 (0.982)	59 (0.997)
Niigata	VIII	5	59 (0.959)	26 (0.921)	58 (0.899)
Tokyo	VIII	13	58 (0.998)	27 (0.994)	58 (0.997)
Yamaguchi	VI	12	59 (0.996)	27 (0.987)	59 (0.997)
Tokushima	VIII	11	57 (0.994)	26 (0.987)	58 (0.994)
Tsushima Is.	V	14	61 (0.984)	28 (0.969)	59 (0.994)
Yakushima Is.	IX	10	58 (0.997)	26 (0.993)	59 (0.998)
Okinawa Is.	XI	4	58 (1)	27 (0.997)	58 (0.999)
Ogasawara Is.	XII-I	4	60 (0.998)	28 (0.994)	60 (0.999)
Taiwan	X	10	58 (0.989)	26 (0.974)	57 (0.988)
Thailand	XI	10	56 (0.994)	25 (0.989)	56 (0.983)
Philippines	VIII	12	56 (0.992)	25 (0.977)	57 (0.990)
(♀)					
Fukuoka	V	10	62 (0.997)	28 (0.986)	59 (0.991)
"	VIII	12	61 (0.996)	28 (0.994)	58 (0.995)
Niigata	VIII	12	61 (0.987)	28 (0.984)	57 (0.996)
Tokyo	VIII	12	61 (0.996)	28 (0.992)	58 (0.994)
Tottori	VII	10	62 (0.978)	28 (0.987)	58 (0.957)
Yamaguchi	VI	13	62 (0.996)	29 (0.992)	59 (0.994)
Tokushima	VIII	11	60 (0.992)	28 (0.988)	57 (0.981)
Tsushima Is.	V	13	63 (0.993)	29 (0.989)	59 (0.995)
Yakushima Is.	X	13	60 (0.988)	27 (0.974)	58 (0.984)
Okinawa Is.	XI	10	60 (0.996)	27 (0.977)	58 (0.991)
Ogasawara Is.	XII-I	14	60 (0.996)	28 (0.971)	58 (0.992)
Taiwan	X	10	61 (0.995)	27 (0.989)	58 (0.987)
Thailand	XI	10	58 (0.994)	26 (0.991)	55 (0.998)
Philippines	VIII	13	59 (0.980)	26 (0.942)	56 (0.971)
Sumatra	?	3	59 (1)	27 (0.998)	57 (1)

表-5. ヤサガタアシナガグモ *T. japonica* Bös. et Str. の腿節長比。

Locality or Country	Month of collection	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)					
Fukuoka	V	12	65 (0.990)	34 (0.980)	70 (0.992)
"	VIII	12	66 (0.993)	35 (0.984)	71 (0.995)
Niigata	VIII	5	65 (0.641)	34 (0.494)	70 (0.577)
Tokyo	VIII	13	65 (0.998)	34 (0.997)	70 (0.998)
Yamaguchi	VI	12	65 (0.996)	35 (0.990)	71 (0.997)
Tokushima	VIII	11	64 (0.996)	34 (0.990)	70 (0.995)
Tsushima Is.	V	14	67 (0.993)	35 (0.970)	72 (0.993)
Yakushima Is.	X	10	64 (0.996)	34 (0.994)	71 (0.996)
Okinawa Is.	XI	4	64 (1)	33 (0.999)	71 (1)
Ogasawara Is.	XII-I	4	66 (0.995)	35 (0.978)	72 (0.999)
Taiwan	X	10	64 (0.987)	33 (0.976)	69 (0.988)
Thailand	XI	10	62 (0.997)	32 (0.989)	68 (0.994)
Philippines	VIII	12	63 (0.987)	32 (0.980)	70 (0.981)
(♀)					
Fukuoka	V	10	67 (0.994)	35 (0.991)	71 (0.980)
"	VIII	12	66 (0.994)	35 (0.991)	70 (0.992)
Niigata	VIII	12	66 (0.985)	35 (0.982)	69 (0.987)
Tokyo	VIII	12	66 (0.994)	35 (0.985)	70 (0.988)
Tottori	VII	10	67 (0.993)	35 (0.897)	70 (0.944)
Yamaguchi	VI	13	67 (0.997)	36 (0.989)	71 (0.991)
Tokushima	VIII	11	66 (0.981)	35 (0.970)	70 (0.950)
Tsushima Is.	V	13	67 (0.992)	36 (0.989)	72 (0.987)
Yakushima Is.	X	13	66 (0.987)	35 (0.953)	71 (0.983)
Okinawa Is.	XI	10	65 (0.995)	34 (0.982)	70 (0.990)
Ogasawara Is.	XII-I	14	65 (0.997)	35 (0.986)	70 (0.989)
Taiwan	X	10	65 (0.991)	34 (0.971)	69 (0.976)
Thailand	XI	10	63 (0.982)	33 (0.994)	67 (0.990)
Philippines	VIII	13	64 (0.970)	33 (0.920)	69 (0.960)
Sumatra	?	3	65 (1)	34 (1)	69 (0.999)

表一6. オナガアシナガグモ *T. javana* (Thorell) の脚長及び腿節長比(上段脚長、下段腿節長)

Country	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Japan	10	57 (0.969)	25 (0.918)	58 (0.959)
Taiwan	3	56 (0.993)	24 (0.992)	56 (0.998)
Thailand	10	54 (0.997)	23 (0.991)	55 (0.988)
Total	23	56 (0.972)	24 (0.943)	56 (0.959)
(♀)				
Japan	10	55 (0.943)	25 (0.863)	57 (0.941)
Taiwan	1	54 /	24 /	54 /
Thailand	10	53 (0.960)	23 (0.964)	54 (0.963)
Total	21	54 (0.927)	24 (0.837)	55 (0.901)
(♂)				
Japan	10	64 (0.970)	31 (0.897)	71 (0.958)
Taiwan	3	62 (0.996)	30 (0.996)	69 (0.989)
Thailand	10	61 (0.990)	30 (0.968)	67 (0.924)
Total	23	62 (0.968)	30 (0.941)	69 (0.937)
(♀)				
Japan	10	61 (0.958)	31 (0.894)	70 (0.925)
Taiwan	1	60 /	31 /	66 /
Thailand	10	59 (0.970)	29 (0.952)	66 (0.943)
Total	21	60 (0.940)	30 (0.853)	68 (0.867)

表-7. リュウキュウアシナガグモ *T. makiharai* Okuma の脚長及び腿節長比(上段脚長、下段腿節長)。

Locality	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Okinawa Is.	14	56 (0.982)	24 (0.965)	53 (0.987)
Amami Is.	4	56 (0.923)	25 (0.985)	53 (0.919)
Kume Is.	2	57 /	24 /	54 /
Tsushima Is.	4	55 (0.993)	24 (0.981)	51 (0.981)
Total	24	56 (0.979)	24 (0.957)	53 (0.967)
(♀)				
Okinawa Is.	22	55 (0.885)	25 (0.833)	54 (0.892)
Amami Is.	5	56 (0.887)	26 (0.630)	54 (0.783)
Kume Is.	2	53 /	23 /	52 /
Tsushima Is.	7	55 (0.956)	24 (0.857)	52 (0.957)
Total	36	55 (0.872)	25 (0.773)	54 (0.875)
(♂)				
Okinawa Is.	14	62 (0.977)	29 (0.915)	63 (0.956)
Amami Is.	4	64 (0.865)	30 (0.997)	64 (0.965)
Kume Is.	2	63 /	29 /	63 /
Tsushima Is.	4	61 (0.971)	28 (0.973)	60 (0.977)
Total	24	62 (0.958)	29 (0.860)	62 (0.947)
(♀)				
Okinawa Is.	22	61 (0.918)	28 (0.860)	64 (0.898)
Amami Is.	5	62 (0.944)	30 (0.899)	64 (0.312)
Kume Is.	2	59 /	27 /	63 /
Tsushima Is.	7	61 (0.952)	28 (0.726)	62 (0.978)
Total	36	61 (0.902)	28 (0.788)	63 (0.862)

表一8. オオアシナガグモ *T. mandibulata* Walck. の脚長及び腿節長比(上段脚長
下段腿節長)。

Country	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Japan	4	61 (0.991)	27 (0.970)	59 (0.994)
Taiwan	10	59 (0.990)	25 (0.977)	58 (0.986)
Thailand	10	58 (0.997)	25 (0.986)	57 (0.997)
Total	24	59 (0.983)	25 (0.965)	58 (0.987)
(♀)				
Japan	9	60 (0.992)	28 (0.983)	60 (0.977)
Taiwan	10	60 (0.995)	27 (0.830)	59 (0.991)
Thailand	10	59 (0.960)	26 (0.958)	58 (0.966)
Total	29	60 (0.991)	27 (0.965)	60 (0.918)
(♂)				
Japan	4	68 (0.977)	34 (0.953)	73 (0.989)
Taiwan	10	67 (0.980)	33 (0.966)	72 (0.977)
Thailand	10	66 (0.997)	33 (0.985)	71 (0.997)
Total	24	67 (0.979)	33 (0.967)	72 (0.981)
(♀)				
Japan	9	67 (0.985)	35 (0.966)	73 (0.983)
Taiwan	10	66 (0.984)	34 (0.928)	72 (0.970)
Thailand	10	65 (0.886)	33 (0.851)	71 (0.869)
Total	29	66 (0.980)	34 (0.960)	72 (0.975)

表-9. ヒカリアシナガグモ *T. nitens* (Audouin) の脚長及び腿節長比(上段脚長、下段腿節長)。

Country	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Japan	7	69 (0.985)	31 (0.973)	64 (0.982)
Taiwan	10	68 (0.998)	30 (0.989)	63 (0.997)
Thailand	10	67 (0.998)	29 (0.992)	62 (0.998)
Total	27	68 (0.991)	30 (0.981)	63 (0.991)
(♀)				
Japan	10	68 (0.997)	31 (0.990)	64 (0.993)
Taiwan	10	68 (0.992)	31 (0.982)	65 (0.993)
Total	20	68 (0.996)	31 (0.990)	64 (0.994)
(♂)				
Japan	7	77 (0.994)	38 (0.986)	76 (0.991)
Taiwan	10	76 (0.997)	37 (0.976)	75 (0.996)
Thailand	10	74 (0.998)	37 (0.989)	74 (0.994)
Total	27	75 (0.994)	37 (0.979)	75 (0.991)
(♀)				
Japan	10	75 (0.993)	37 (0.985)	76 (0.993)
Taiwan	10	74 (0.994)	37 (0.973)	77 (0.997)
Total	20	74 (0.995)	37 (0.984)	76 (0.995)

表-10. シコクアシナガグモ *T. shikokiana* Yaginuma の脚長及び腿節長比(上段脚長 下段腿節長)。

Locality	n	2nd leg ratio (r)	3rd leg ratio (r)	4th leg ratio (r)
(♂)				
Tokyo	5	70 (0.998)	30 (0.995)	64 (0.998)
Tokushima	8	68 (0.994)	29 (0.869)	63 (0.963)
Fukuoka	2	67 /	29 /	64 /
Tsushima Is.	1	70 /	31 /	65 /
Total	16	68 (0.991)	30 (0.963)	63 (0.991)
(♀)				
Tokyo	4	69 (0.991)	32 (0.995)	67 (0.996)
Tokushima	5	68 (0.978)	31 (0.988)	66 (0.988)
Fukuoka	6	69 (0.998)	31 (0.987)	66 (0.985)
Tsushima Is.	1	71 /	31 /	68 /
Korea	2	71 /	31 /	66 /
Total	18	69 (0.991)	31 (0.986)	66 (0.990)
(♂)				
Tokyo	5	76 (0.997)	35 (0.997)	75 (0.997)
Tokushima	8	74 (0.994)	35 (0.923)	74 (0.966)
Fukuoka	2	74 /	34 /	75 /
Tsushima Is.	1	69 /	34 /	75 /
Total	16	74 (0.981)	35 (0.981)	75 (0.992)
(♀)				
Tokyo	4	74 (0.958)	36 (0.996)	79 (0.999)
Tokushima	5	74 (0.956)	37 (0.786)	77 (0.931)
Fukuoka	6	74 (0.995)	36 (0.957)	80 (0.981)
Tsushima Is.	1	76 /	35 /	80 /
Korea	2	76 /	37 /	78 /
Total	18	74 (0.986)	36 (0.945)	79 (0.984)

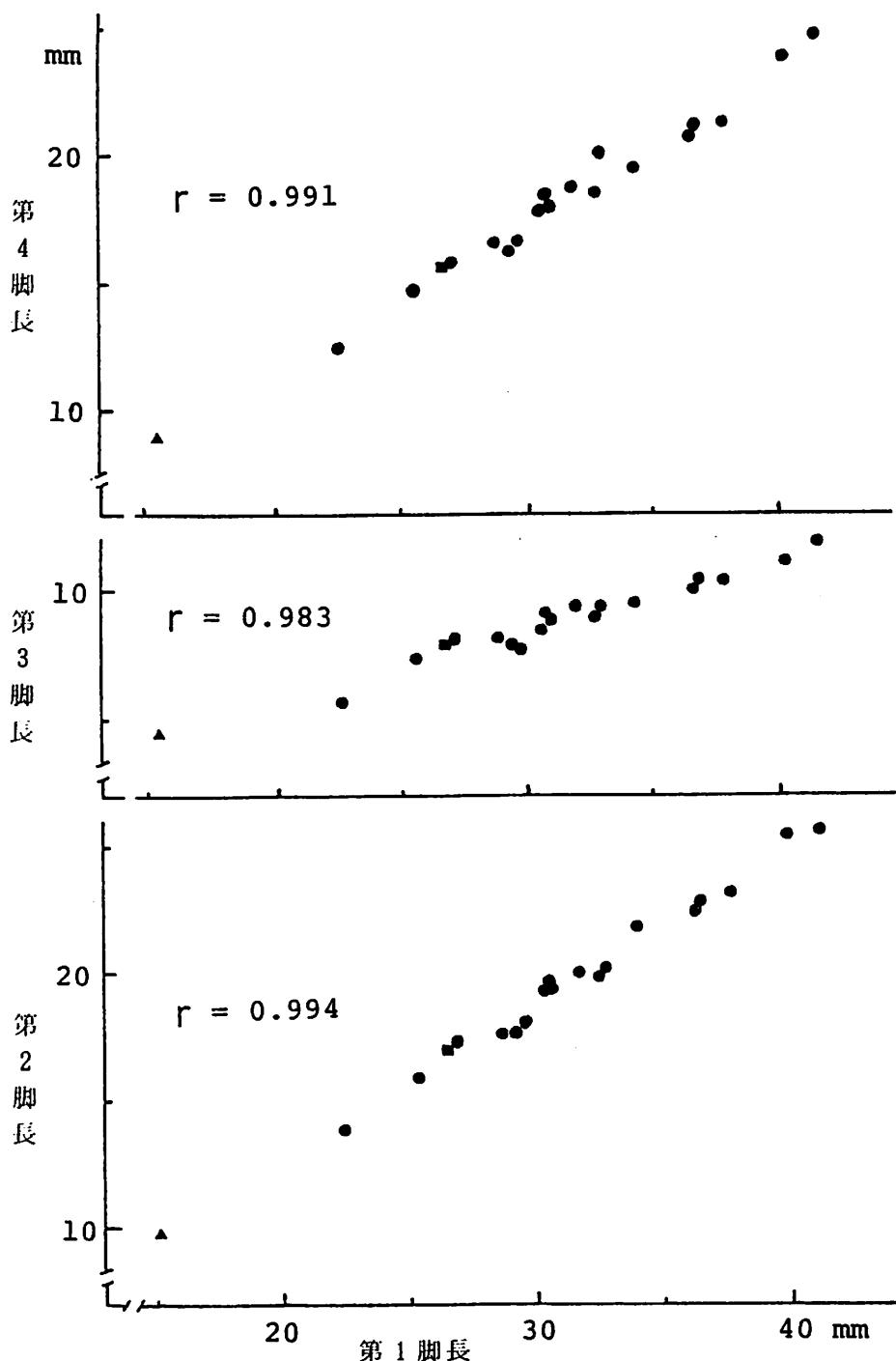


図-1. アシナガグモ *T. praedonia* L. Kochの雄の第1脚長に対する 第2. 3. 4脚長。
横軸は第1脚。縦軸はそれぞれ 第2. 3. 4脚の脚長。

九州の洞窟産真正蜘蛛類 (Ⅳ)

入江照雄

熊本県立教育センター

Cave Spiders of Kyushu (IV)

Teruo IRIE

Kumamoto Education Center, Yamaga-City, Kumamoto

前回の報文(Ⅲ-1980)に追加されるべき洞窟名、新産地のクモならびに新しく目録に追加されるクモについて述べる。

マシラグモ、ナミハグモなどまだ整理検討中のものが多い。ナミハグモについては、すでに記載されている5種について記録する。しかし、熊本県産のナミハグモについては今後資料収集に努め、充分な検討をしていくつもりである。

本研究にあたり、終始変らぬご指導を賜わっており、また今回本文の校閲をお願いした追手門学院大学の八木沼健夫博士、大分県の*Nesticidae*について色々とご教示いただいた東亜蜘蛛学会会員の菊屋奈良義氏、ならびに種々ご指導ご教示いただいている熊本大学名誉教授の吉倉真博士、国立博物館の上野俊一博士に対し謹んで感謝の意を表します。なお、井原山の廃坑調査にご協力いただいた熊本洞穴研究会会員の荒井秋晴・船越公威両氏に対し厚くお礼を申し上げる。

九州の洞窟(追加)

著者の調査により、前図(Ⅲ-1980)のリストに新しく追加される洞窟は、福岡県3カ所、大分県2カ所、鹿児島県1カ所の合計6カ所である。なお、洞窟番号は前回からの続きである。

〔福岡県〕

149. 奥の院の穴 Okunoin-no-ana Cave (嘉穂郡嘉穂町千手・古処山) 石灰洞

150. 大将かくしの穴 Taisyokakushi-no-ana Cave (同 上) 石灰洞

151. 井原山の廃坑 Iharayama no abandoned Mine (糸島郡前原町井原) 人工洞

〔大分県〕

152. ホーオン池下の試掘坑 Hoonikeshita prospected Mine (速見郡山香町大字山浦字定野尾) 人工洞

153. 火灯の小穴 Hitoboshi-no-koana Cave (臼杵市東神野字宮本) 石灰洞

〔鹿児島〕

154. 中岳洞 Nakadake-dō Cave (壱岐郡未吉町大字南之郷字中岳) 凝灰岩洞.

九州の洞窟産クモ目録（追加）

次に、新産地のクモと目録に新しく追加されるクモについて述べる。このリストの分類は、前回と同様、八木沼氏の「日本産真正蜘蛛類目録」(1977)に従った。種名番号の頭に付した記号は八木沼(1976)に準拠した分類である。洞窟名のあと()内の番号は、洞窟リストの番号である。なお、産地・新産地に採集者名のないものは、すべて著者による採集である。

〔新産地のクモ〕

- 4. *Uloborus varians* Bos. et Str. ウズグモ
(*Uloboridae* ウズグモ科)
 - 分布：北海道・本州・四国・九州・南西諸島
 - 既知産地：米塚の穴(8), 布勢洞(16), 風神洞(17), 川原谷の穴(28), 貴の穴(30), 大金峰洞(34), 九折瀬洞(55), 山口洞(68), 太子ヶ岩屋(84), 乳ノ窟(86), 仲塔洞(91), 松木稻荷の穴(92), 尾平野洞(107), 水無洞〔福岡一田中真悟〕
 - 新産地：古処の風穴(122) [26—I—1972], 火灯洞(146) [31—V—1981], ホーオン池下の試掘坑(152) [30—I—1980], 火灯の小穴(153) [31—V—1981]
- 10. *Theridion ferrumequinum* Bös. et Str. ヒザブトヒメグモ
(*Theridiidae* ヒメグモ科)
 - 分布：北海道・本州・四国・九州
 - 既知産地：内谷洞(62), 大將軍の穴(102), 尾平野洞(107), くまぞ穴(113), 坂下穴(114),
 - 新産地：狩生洞(134) [11—I—1980], 猪権現穴(135) [12—I—1980], 中岳洞(154) [25—I—1981]
- ◎ 12. *Nesticus brevipes* Yaginuma コホラヒメグモ
(*Nesticidae* ホラヒメグモ科)
 - 井原山の廃坑では、他に長肢系の *Nesticus* sp. を採集している。
 - *Nesticus* は、大別して長肢系と短肢系に分かれる。この2系が同一の洞窟に混在する記録は、蛇穴(愛知県豊橋市)と下子谷坑(和歌山県熊野川谷)だけであった。
 - 今回、井原山の廃坑から両系が得られたことは貴重な資料となる。
 - 分布：本州・四国・九州
 - 既知産地：穴八幡の穴(2), 貴の穴(30), 高沢洞(48), 新地の穴(76), 尾平野洞(107), 権現穴(115), 先不知井坑〔五島一上野・山口〕, 霧島〔洞外一西川〕, 市房山〔洞外〕
 - 新産地：井原山の廃坑(151) [13—I—1981], 菊池渓谷〔熊本, 洞外・12—I—1978 〕

◎ 17. *Conoculus lyugadinus* Komatsu ヨリメグモ
(*Sympytognathidae* ヨリメグモ科)

- 分布：本州・四国・九州・沖縄
- 既知産地：穴ん城の穴(1), 穴八幡の穴(3), 貢の穴(30), 千人隠洞(45) [入江・高松], 黒仁田洞(49), 初神の岩屋(64), 大白尾隊道(89), 仲塔洞(91), 大將軍の穴(102), 野添の穴(103), 榎園の穴(104), 溝ノ口洞(109), 青葉台の穴(121), 千仏鍾乳洞(126) [石川], 岩屋(第1)鍾乳洞(132), 清水洞(133) [石川・入江], こうもり穴(144), 太鼓橋の穴(147), 穴森の穴(148), 人吉 [洞外]
- 新産地：風神洞(17) [18-VI-1981], 小半鍾乳洞(137) [3-XI-1975], ホーオン池下の試掘坑(152) [30-XI-1980], 菊池渓谷 [洞外・21-X-1978]

◎ 23. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ
(*Heteropodidae* アシダカグモ科)

- 分布・本州・四国・九州・対馬・南西諸島
- 既知産地：米塚の穴(8), 立神の穴(23), 西の岩洞(36), 矢山岳のたて穴(38), 高沢洞(48), 荒地の穴(63), 告洞(70), 中河内洞(74), 童子瀧の穴(90), 水無の穴(96), 榎園神社の穴(106), 荒茂の穴(116)
- 新産地：ホーオン地下の試掘坑(152) [30-XI-1980]

◎ 35. *Nesticus furenensis* Yaginuma フウレンホラヒメグモ
(*Nesticidae* ホラヒメグモ科)

- 分布：九州
- 既知産地：風連鍾乳洞(138) [福沢・平化], コウモリ穴(140), 岩屋の穴(142)
- 新産地：猪権現穴(135) [2-XI-1975]
雄が採れていないが雌の epigynum により, *N. furenensis* Y. とする。

[目録に新しく追加されるクモ]

◎ 40. *Nesticus mogera* Yaginuma チビホラヒメグモ
(*Nesticidae* ホラヒメグモ科)

- *Nesticus* は、体長と歩脚比から長肢系と短肢系に分けられる。
- 長肢系については、現在までに 40 種 10 亜種 (八木沼, 1979. 1980) が記載されているが、まだ未記載も多い。
- 短肢系は、*N. brevipes* コホラヒメグモ, *N. mogera* チビホラグモ, *N. okinawaensis* オキナワホラヒメグモの 3 種が我が國に分布する。

- *N. mogera* の分布は、東京・静岡・和歌山・鳥取・岡山・宮古島・与論島で、今回の菊屋氏の採集が九州本島の初記録となる。
- 分布：北海道・本州・四国・九州・（ハワイ）
- 産地：小野田採鉱場の人工トンネル〔大分・4-X-1979, 菊屋氏採集, 八木沼氏同定〕

◎ 41. *Nesticus karyuensis* Yaginuma カリウホラヒメグモ
(Nesticidae ホラヒメグモ科)

- 体長 ♂ 3.8～4.0mm, ♀ 4.5～5.0mm
- 狩生洞からは野村茂氏により採集されていたが、雄が採れなく未記載のままになっていた。
- 今回、菊屋氏の努力により胡麻柄山（津久見市）の人工トンネルから雄が採集され、狩生洞のものと同種にされ種名が決定された。
- 著者は、胡麻柄山近くの3カ所の洞窟から採集しているが、成体を比較検討した結果 *N. karyuensis* と同種と判定した。（Fig. 1）（Fig. 2）
- 新分布：九州
- 産地：狩生洞（134）〔13-II-1955, 野村茂・2-XI-1975〕，川原内の穴（145）〔31-V-1981〕，火灯洞（146）〔6-XII-1979〕，火灯の小穴（153）〔31-V-1981〕，小野田採鉱場の人工トンネル〔18-V-1980, 菊屋氏採, 八木沼氏同定〕

◎ 42. *Cybaeus ashikitaensis* (Komatsu) アシキタナミハグモ
(Agelenidae タナグモ科)

- 体長 ♀ 4.5～5.0mm
- 熊本県の洞窟産ナミハグモについて4種が記載されているが、今後資料収集に努め、記載種を含め充分な検討をしたいと思っているクモである。
- 新分布：九州
- 産地：芦北洞（73）

◎ 43. *Cybaeus fuujinensis* (Komatsu) フウシンナミハグモ
(Agelenidae タナグモ科)

- 体長 ♀ 3.8～4.0mm
- 新分布：九州
- 産地：風神洞（17）

◎ 44. *Cybaeus nichikoensis* (Komatsu) ニチコウナミハグモ
(Agelenidae タナグモ科)

- 体長 ♀ 4.5—4.8 mm
- 新分布：九州
- 産地：日光洞(27)

◎ 45. *Cybaeus takasawaensis* (Komatsu) タカサワナミハグモ
(Agelenidae タナグモ科)

- 体長 ♀ 4.5—4.8 mm
- 新分布：九州
- 産地：高沢洞(48)

◎ 46. *Cybaeus uenoi* Yaginuma ツシマナミハグモ
(Agelenidae タナグモ科)

- 体長 ♀ 4.7 mm
- 新分布：九州(対馬)
- 産地：相成坑(対馬；19-X-1969. 上野)

ま　　と　　め

- 現在までに、著者が確認し調査した洞窟は、福岡県14カ所、長崎県1カ所、大分県17カ所、熊本県83カ所、宮崎県29カ所、鹿児島県10カ所の合計154カ所である。
- 今回、目録に追加されたクモは7種となる。前回までに報じたクモを加えると46種となる。
- Nesticus* の長肢系と短肢系が同一洞窟内で記録されたのは、井原山の廃坑が蛇穴(愛知県)・下子谷坑(和歌山県)につき3番目である。
- 九州産の長肢系*Nesticus* は、今回*N. karyuensis* カリウホラヒメグモが追加され、6種が明らかになった。

参　考　文　獻

前回(I～III)に掲げた文献は省略する。

- 入江 照雄, 1980. 九州の洞窟産真正蜘蛛類(Ⅲ)HEPTATHELA 1(3): 19—28.
- Komatsu, T., 1968. Cave Spiders of Japan II. *Cybaeus*, *Dolichocybæus* and *Heterocybæus* (Cybaeinae). Arach. Soc. East Asia, Osaka. pp.1—38.
- , 1968. Two New Cave Spiders of Genera *Tetrablemma* (Tetrablemminae, Oonopidae) and *Dolichocybæus* (Cybaeinae). Acta. arachnol., 21 (2): 35—39.

4. ———, 1970. Two New Spiders of the Genus *Dolichocybaeus* from Japan. *Acta arachnol.* 23 (1) : 13—16.
5. 小松 敏宏, 1974. 日本産ナミハグモ亜科について—講演要旨一. *Atypus*, (62) : 4—5.
6. Yaginuma, T., 1970. Two New Spiders of the Genera *Leptoneta* and *Dolichocybaeus* from the Islands of Tsushima. *Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo*, 13 (2) : 241—248.
7. 八木沼健夫, 1972. コホラヒメグモとチビホラヒメグモの再検討—講演要旨一. *Atypus*, (60) : 5—6.
8. Yaginuma, T., 1972. Revision of the Short-legged Nesticid Spiders of Japan. *Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo*, 15 (4) : 619—622.
9. 八木沼健夫, 1977. 日本産真正蜘蛛類目録. *Acta archnol.* 27 (S. NO.)
10. Yaginuma, T., 1979. A Study of the Japanese Species of Nesticid Spiders. *Fac. Let. Rev. Otemon Gakuin Univ.* (13) : 255—287.
11. 八木沼健夫, 1980. 日本産 *Nesticus* 属の研究(補遺). *追大文紀*, (14) : 241—250.

<訂 正>

前回の報文(Ⅲ—1980), p. 19, 122 古処の風穴で「(嘉穂郡千手町古処山)花崗岩の穴」となっているのは、「(嘉穂郡嘉穂町千手・古処山)石灰洞」に訂正します。

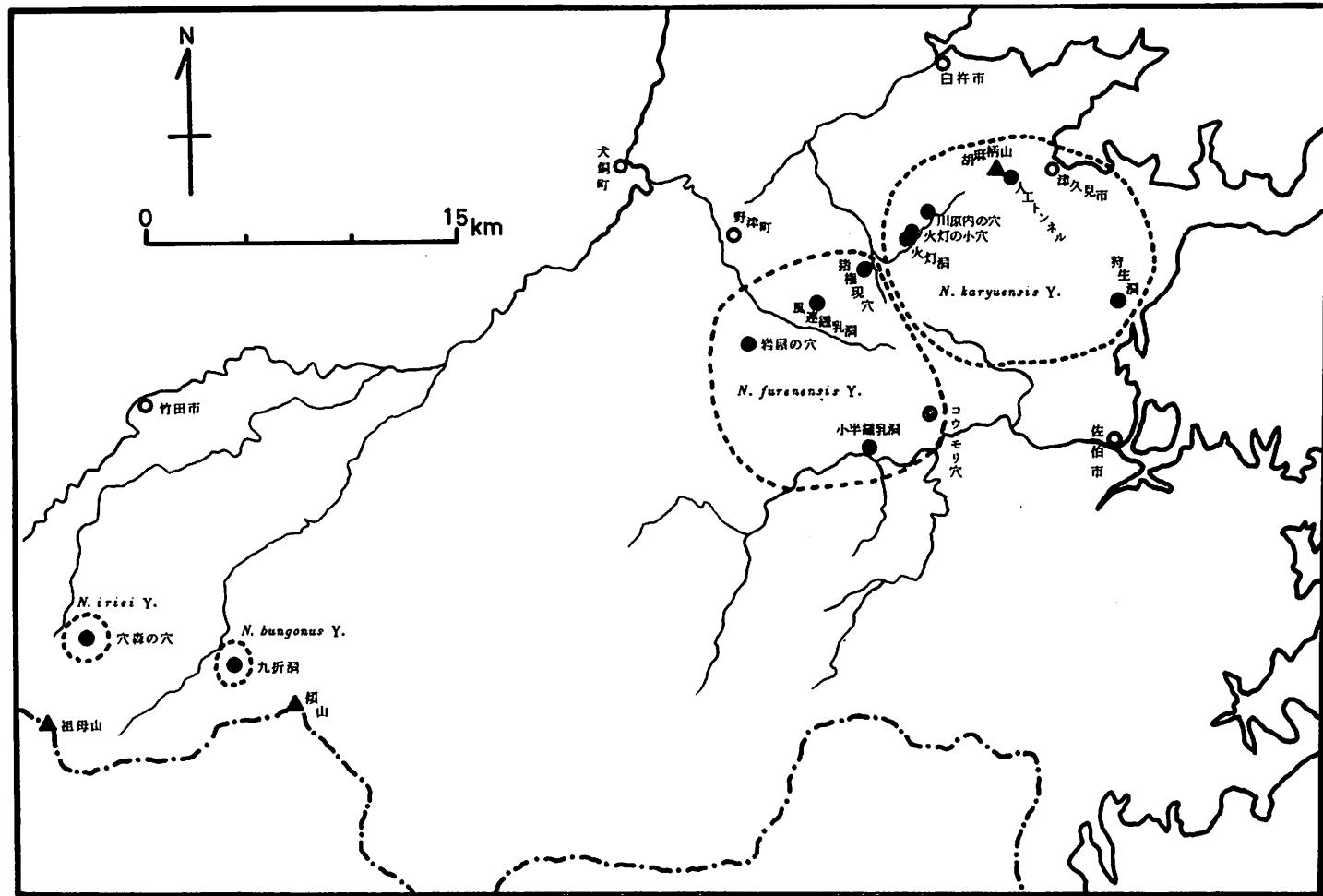


Fig. 1 大分県における *Nesticus* (長肢系) の分布

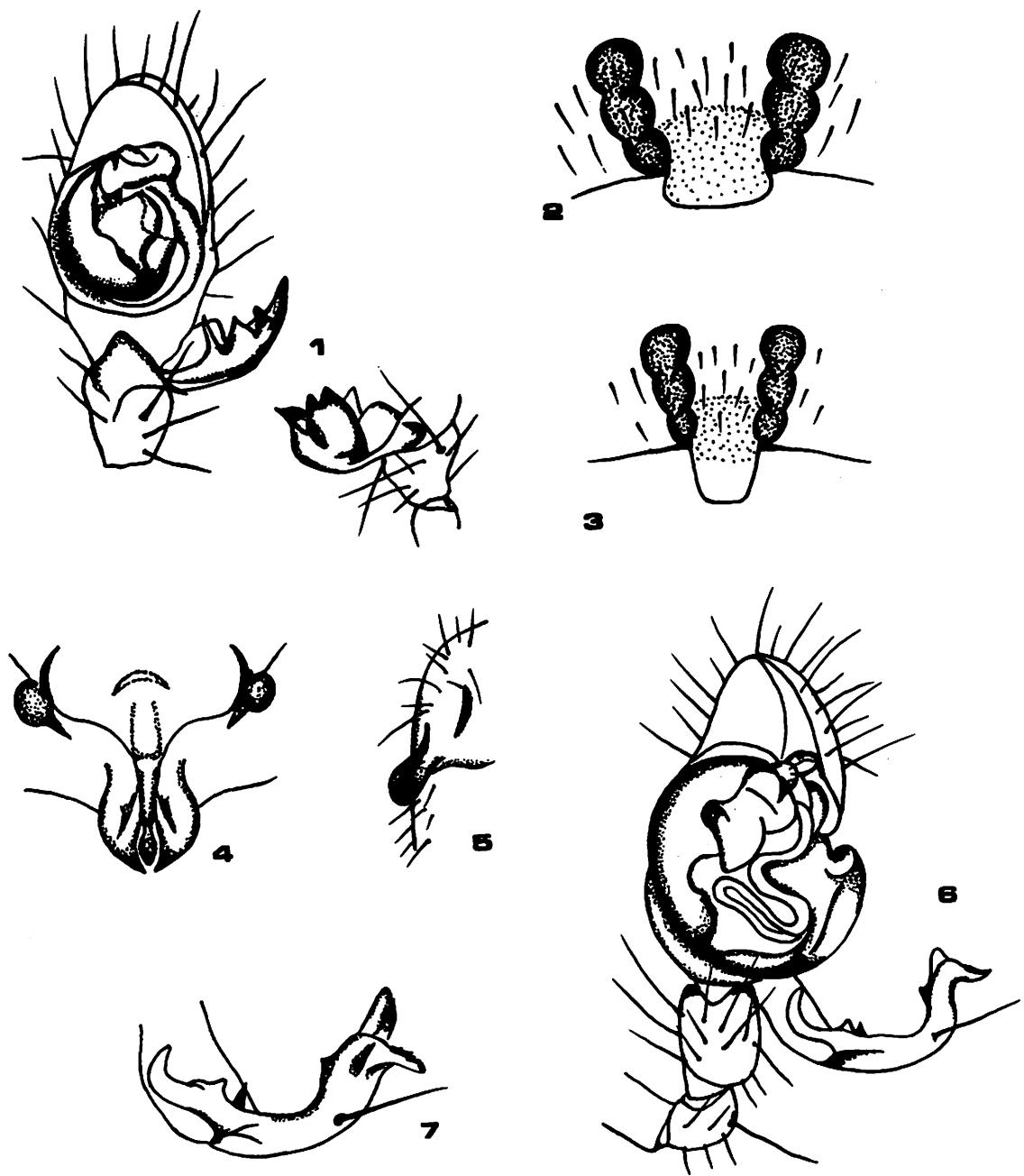


Fig. 2

1. *Nesticus brevipes* Yaginuma ; male palp (from Kikuchi-keikoku Gorge). —
2. Same species ; epigynum. — 3. Same species ; epigynum (from Iharayama no abandoned mine). — 4-5. *N. furenensis* Yaginuma ; epigynum (from Kawaharauchi-no-ana Cave). — 6. Same species ; male palp. —
7. Same species ; paracymbium of palp.

日本産真正クモ類の検討 II.

ハラカタグモ及びアシマダラナミハグモのタイプ標本の再記載

小野展嗣

西ドイツ・マインツ大学

Revision of Japanese spider II.

Redescriptions of *Ceratinella subulata* (Erigonidae)
and *Cybaeus striatipes* (Agelenidae)

Hirotsugu ONO

Mainz-Universitat, West Germany

明治11年(1978年), L. コッホ (L. Koch) によって日本のクモが初めて記載されて以来今日まで100年あまりの間に, 1000種近くのクモが日本から知られるようになった。しかしその中に今日は今日なお多くのいわゆる正不明種が含まれており, それらは前報(小野, 1981)で指摘したように, 次の3つの視点から捉えられる。即ち(1)命名規約上問題のある学名を持った種(八木沼, 1978参考), (2)ヨーロッパ等のクモに同定された種のうちその同一性に問題のあるもの, (3)原記以来採集記録のない種, の3つである。

このうち(1)に関してはなかなか頭の痛い問題であるが, スズキコモリグモのように解決したものもある。(2)の場合は広範囲に分布している種或はグループの比較研究が進めば漸次解決していくと思われる。例えば筆者(小野, 1975)がかつてヨーロッパの *Gonatum rubens* (Blackwall) と同定したオニノカナボウケズネグモなどはヨーロッパのものとは別種で, 日本のものは新種となるようである(八木沼及び Millidge の私信による)。また筆者は最近, 日本のガザミグモとヨーロッパのものとのが別種であることを確かめることができた。このようなケースはこれからどんどん出てくるものと思われるが, 地理的変異の解明などは, 中国, ソ連, 東欧, 西アジアなどの標本が入手しにくいので難しく, 現状では旧北区の両端の個体を比較して満足せざるを得ないことが多い。

(3)のクモの中には, そのクモ自体が超珍品で, 南方からの迷蛛のように要するに今まで原記載一回きりしか採集記録のないものもあるだろうが, 多くは原記載が不充分だったり, 図がわかりにくかつたり, 当時の観察技術ではよく構造がわからなかったりするために, そのクモが時折採集されてもその種に同定されずに終ってしまい, 時によっては別の名で記載されているようなものである。この解明にあたってはタイプ標本が残っていればその再検討が望まれる。筆者は居所を生かしてこのような方向で隨時調査を行っているが, コキハダカニグモのように意外に普通に産するものが発見される

可能性もある（小野，1978）。ここではこの(3)に当るクモの中から2種を選んで生殖器の図示、再記載を試みる。これが今後の再発見の足がかりとなれば幸いである。

標本の観察に際しては Grasshoff（フランクフルト）、Tiefenbacher（ミュンヘン）両氏のお世話になったのでお礼申し上げる。

Cybaeus striatipes Boesenberg et Strand

アシマダラナミハグモ（図1-5）

Cybaeus striatipes Boesenberg et Strand, 1906, Abh. senckenberg. naturforsch. Ges., 30: 295.

タイプ標本：Nord-Japan（北日本）その他不明, 1♀ (Zool. Staatssammlung München 所蔵)。

測定：頭胸部長 4.3, 同幅 3.1。腹部長 5.5, 同幅 4.1 [単位mm]。

頭胸部（図1-2）：前側眼>後側眼>後中眼>前中眼（7:6:5.5:4），前中眼間>前中側眼間（5.5:4），後中眼間>後中側眼間（11:7），中眼域は前辺<後辺（14:22），長さ<幅（16:22）。額は前中眼間よりはるかに広い（14:5.5），両側眼はわずかに離れる。両眼列上方からみて後曲，前方からみて前曲。上顎は外顎を有し前方にふくらむ。前牙堤に3歯，後牙堤に5歯。下唇は長さ=幅（17:16），下顎の長さは下唇の長さの倍に満たない（28:17），胸板は長さ>幅（54:45）。歩脚はすべて脱落して同じびんの中に存在するが（6本のみ），測定，刺の記載は困難なので省略する。

腹部は若干いたむ。

生殖器：外雌器はキチン化し開口部は三角形を呈する（図3）。内部の形態は図4-5の通り。

色彩及び斑紋：背甲及び上顎赤褐色，下顎，下唇，歩脚は褐色，腹部はいたんで退色しているが，かつて葉状の斑紋があったであろうことがうかがえる。

備考：標本ラベルには命名者が Strand のみとなっている。

Ceratinella subulata Boesenberg et Strand

ハラカタグモ（図6-12）

Ceratinella subulata Boesenberg et Strand, Abh. senckenberg. naturforsch. Ges., 30: 158.

タイプ標本：Japan, Korats, 1889（原記では 10. August 1884 となっている。），

Doenitz 採集, 1♂ (Senckenberg-Museum Frankfurt am Main 所蔵, NO. SMF-3626)。

測定: 体長 1.30, 頭胸部長 0.58, 同幅 0.50, 腹部長 0.83, 同幅 0.68。

頭胸部(図 6-8): 頭部隆起はさほどはげしくない。全眼ほぼ同大, 前中眼のみやや小さい。前中眼間は前中側眼間および前中眼直径の半分, 後中眼間 > 後中側眼間(3:2), 中眼域は前辺 < 後辺(3.75:7), 長さ > 幅(7:6), 額は広く前中眼直径の4倍近い, 下顎は八字状, 下唇は幅広い(図 9)。胸板はわずかに長さ > 幅(14:13), 第4基節間を広くわかつ, 後端は切断状。背甲にアバタ状小凹点を有す。

♂触肢: 図 10-12 参照。

歩脚はかなり生彩を失っており刺や毛は観察しにくい。

腹部: 表面はキチン化してかたく, 多数のクレーターを有す。Boesenbergs の原図には4つの圧入点があるが消失している。

色彩及び斑紋: 退色して生時の色彩は判別できないが, 原記では背甲, 腹部とも褐色となっている。

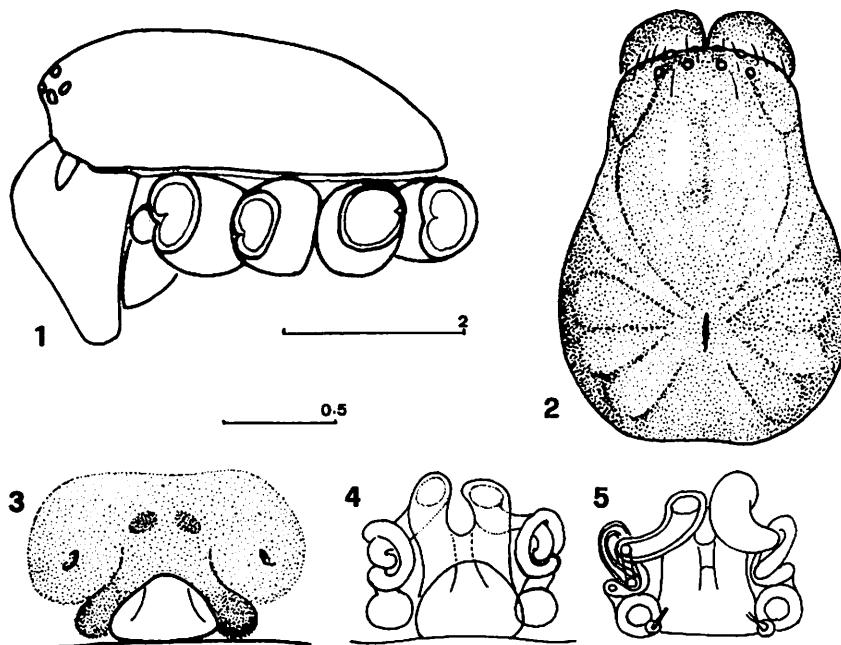


図 1-5. *Cybaeus striatipes* Bö. et Str. ♀

1) 頭胸部上面より, 2) 頭胸部下面より, 3) 外鰓器, 4) 内部生殖器下面より, 5) 同上面
より。(単位mm)

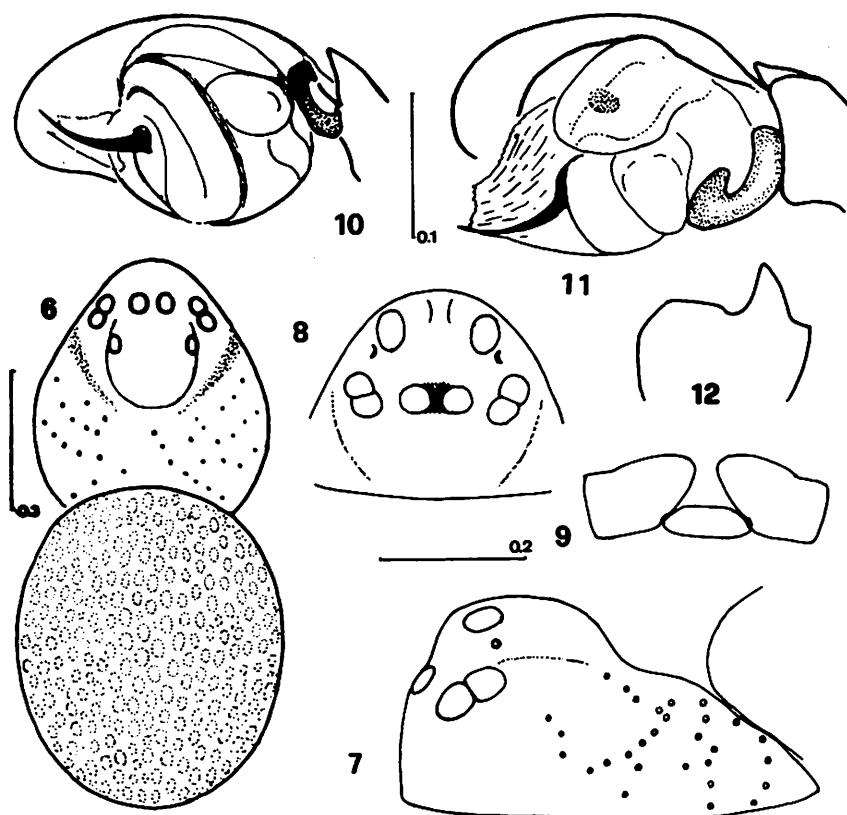


図6-12. *Ceratinella subulata* Böss. et Str. ♂
 6) 胸腹部及び腹部。7) 胸腹部側面より。8) 頭部前面より。9) 下板及び下唇。10) 触肢
 下面より。11) 触肢後脚面より。12) 触肢基節上面より。(単位mm)

引　用　文　献

- Boesenberg und Strand 1906. Japanese Spinnen, — Abh. senckenberg. naturforsch. Ges. 30 : 93 — 422.
- Koch. L., 1878. Japanese Arachniden und Myriapoden. — Verh. zool. bot. Ges. Wien, 27 : 735 — 798.
- 小野 展嗣, 1975. 日光の真正蜘蛛類, — Atypus (64) : 7 — 26.
 1978. コキハダカニグモの再記載, — Atypus (72) : 3 — 7.
 1981. 日本産真正クモ類の検討 I. ヒメグモ科, コガネグモ科, アシナガグモ科及びタナグモ科の数種のシノニム関係, — Acta Arachnol. (印刷中).
- 八木沼健夫, 1978. 命名規約上可用性(適格性)について問題のあるクモの学名, — Atypus (73) : 3 — 13.

会 誌 投 稿 規 定

1. 寄稿者は会員に限る。
2. 原稿の内容は、蝶形類に関するものなら、解説・記録等なんでもよい。ただし、エッセイ等は筆者の了解があれば、「会報」に掲載することもある。
3. 20×20字原稿用紙に、1マス1字で書くこと。ただし、欧文は2マス3字とする。
4. 学名は、赤でアンダーラインを引くこと。
5. 図は墨入れをし、そのまま印刷ができるよう完全なものに仕上げること。
6. 論文の場合は、欧文タイトル、氏名、所属(住所)をつけること。
7. 写真版等特殊技術を要する印刷費用は個人負担とする。
8. 原稿は図表を含め、出来上がりり6頁以内とする。それ以上の長さの原稿については、分載するか、もしくは超過分の費用を個人負担とする。
9. 文献表は、次の例に準じて作成すること。(例)大熊千代子, 1957. トリノフンダマシの造網. Atypus, (13): 3-4.
10. 希望があれば、個人負担で別刷を作製します。必要部数を原稿第1頁に赤で記入のこと。

(原稿の送付先)

〒861-05 熊本県山鹿市小原 熊本県立教育センター・生物研究室内 入江照雄

会 報 投 稿 規 定

速報的記事、エッセイ、自己紹介、ニュース、日頃の所感、会に対する注文、採集会の案内等なんでも結構です。また研究の疑問を寄せあい、それについてみんなで考えるなど、情報交換の場としても役立てていただきたいと思います。原稿は原則として約2000字以内とします。どうか軽い気持で投稿お願いいたします。

(原稿の送付先)

〒812 福岡市東区箱崎 九州大学農学部昆虫学教室内 九州クモの会

編 集 後 記

- 今回も、多くの会員諸氏のご協力により、バラエティーに富んだ内容となりましたこと感謝いたしております。
- 特に、民族学にも造詣深い吉倉会長には、クモに関する民族動物学の興味深い、そして貴重な原稿を書いていただきました。また、小野会員には西ドイツからわざわざ原稿をお送りいただき、会誌に花を添えていただきました。
- 次号も、より充実した内容にしたいと考えております。会員諸氏の気軽な投稿をお待ちします。

(入江)

HEPTATHELA VOL. 2, NO. 1

1981. 9. 1 発行

発行者 吉倉 真

発行所 九州クモの会

〒812 福岡市東区箱崎
九州大学農学部昆虫学教室内

印刷所 平山印刷出版(0963) 82-3630
熊本市下南部町614-5